

2009 年度外務省 NGO 研究会 報告書

受益者の権利に配慮した 援助活動のあり方

はじめに

本報告書は、特定非営利活動法人難民支援協会が外務省からの委託を受け、2009 年度に実施した NGO 研究会「受益者の権利に配慮した援助活動のあり方」の事業成果をまとめたものです。

1990 年代後半から、「Rights Based Approach(権利に基づくアプローチ)」が援助に関わる人たちの間で紹介され、援助を受ける側の権利が意識されるようになってきました。こういった潮流を受け、NGO 研究会ではこれまでも、受益者の権利に配慮した事業形成のあり方についての法的な基礎や、クラスターアプローチの中で権利配慮を中心化させていくことについて学んできました。具体的には、2006 年度は「人道支援におけるプロテクション(受益者の権利保護)」、また 2007 年度は「人間の安全保障におけるプロテクション」と題し、受益者の権利保障について学び、主に NGO を中心とした援助関係者を対象に、人道支援の現場で実際に活用できるようなガイドラインを作成してきました。

過去 2 回の NGO 研究会で学んだことが、支援の現場においてより実効性のあるものとなるよう、今年度の NGO 研究会では、援助する側から援助を受ける側(受益者)に視点を移しました。そして事業の実施段階において、どのように様々な受益者の声を聴き、事業への参加を確保することができるかについて、海外の専門家によるワークショップを通し、理論及び実践を学びました。

第 1 回ワークショップで総論を紹介したことに続き、第 2 回ワークショップでは子どもの権利の専門家を招聘し、事業を実施する中で、なぜ子どもの声を聴く必要があるのかについて、子どもの権利条約に基づき紹介し、その具体的な手法を学びました。

第 3 回ワークショップでは、紛争や対立を更に悪化させることがないよう、対立する両当事者の声に耳を傾け、どのように平等に支援を行っていくかについて、より実践的なアプローチを学びました。

第 4 回ワークショップでは、援助する側の義務である「説明責任」、また国際的な取り組みである「Humanitarian Accountability Partnership(HAP、人道支援の説明責任プログラム)」を紹介し、人道支援の現場に取り入れられるよう参加者間で考える機会を設け、併せて公開シンポジウムも行いました。

本報告書は、今年度の NGO 研究会で行われた全 4 回のワークショップと公開シンポジウムの内容及び資料をまとめたものです。当研究会にご協力いただいた皆様へ感謝するとともに、本報告書が今後の人道支援における受益者の権利保護や、説明責任の取り組みへの一助となれば大変幸いです。

2010 年 3 月

特定非営利活動法人 難民支援協会

目次

■目次	1
■第1章 NGO 研究会の背景と実施方針	2
■第2章 各回ワークショップの報告	5
1. 第1回ワークショップ「オリエンテーション～受益者の権利配慮・総論～」	5
2. 第2回ワークショップ「子どもの声を聴く～子どもの権利に配慮した事業形成のあり方～」	7
3. 第3回ワークショップ「対立する両当事者の声を聴く」	12
4. 第4回ワークショップ「受益者への説明責任確保について」	15
■第3章 公開シンポジウム「受益者の権利に配慮した事業実施のあり方」	19
1. 基調講演	23
2. パネルディスカッション	24
3. 質疑応答	26
4. パネリストの所感	27
■別添資料	29
1. 第1回ワークショップ	30
2. 第2回ワークショップ	33
3. 第3回ワークショップ	47
4. 第4回ワークショップ	63
5. 公開シンポジウム	77

■第1章 NGO 研究会の背景と実施方針

1. 背景と目的

外務省 NGO 研究会「人道支援におけるプロテクション」（2006 年度）及び「人間の安全保障におけるプロテクション」（2007 年度）を通じて、日本の NGO は受益者の権利保護（プロテクション）に関する基本事項を学び、どのようにその考え方をすべての事業に取り入れていくことができるかを研究してきた。

これまで NGO 研究会において扱われてきたプロテクションについての研究会、主に援助を行う側の視点に立ったものであった。プロテクションの総論や各事業での実施における具体的な注意点を考えることができた貴重な学びの機会であったが、これをより実効性のあるものとするためには、事業の実施段階で多様な受益者の参加を確保することが重要となる。例えば、初めて事業を実施する場所で、実施したい事業内容を受益者にどのように説明し、彼らをプログラムに巻き込んでいくか、また受益者が事業に対して不満を持ったときにどのように問題提起し、彼らの意見を聴いていくことができるのか、そしてどのように事業を終了するのかといったことが挙げられる。また、一口に「受益者」と言っても、村の有力者や多数派のみと話すのではなく、子どもや女性、少数派など多様な受益者の参加を確保し、声を聴いていくことも重要である。

そこで、今年度の NGO 研究会においては事業ステージ毎の受益者の参加確保の手法や、起こりうる問題とその対処方法について学び、その成果を関係 NGO と広く共有することを目的とした。

2. 実施方針

以下の 3 点を本研究会の実施方針とした。

- (1) 受益者の権利を配慮して事業を実施していくため、ワークショップ及び公開シンポジウムを通じて、「受益者の声を聴く」をテーマに特定の事例（子どもの声を聴く、対立する当事者の声を聴く、受益者の声を聴く）を取り上げ、理解を深める。
- (2) NGO の枠を超えて、事業実施に関わる関係者（研究者、国際機関、政府機関を含む）の意見も取り入れ、各機関、実務者が考える受益者の権利配慮への重要性についての認識を深める。
- (3) 本研究会を通じて NGO スタッフのキャパシティ・ビルディングを行い、受益者の権利配慮への本質と現地の事例等を通じた実務を学ぶ。

3. 実施方法

2007 年度の NGO 研究会「人間の安全保障におけるプロテクション」を通して調査、研究をともに行ってきた NGO（研究会参加団体 17 団体、うちコアメンバー6 団体）を中心に、更に多くの NGO に参加を呼びかけた。

内容としては、これまで当協会が実施してきた研究会の内容が、支援を行う側が学ぶべき基本事項を中心に研究を重ねていたことを踏まえ、今年度の研究会は事業の対象となる受益者の視点を重視したワークショップを設定した。具体的には彼らの権利に配慮するための事業実施のあり方、すなわち多様な声（多様なニーズや事業実施への不満）をどのように拾い上げるか、子どもや女性などの社会的弱者への配慮、対立する両当事者への配慮など、様々な側面から受益者への権利配慮について講師を招聘し、ワークショップ・公開シンポジウムを通じて、現場での実践方法について学んでいくこととした。

ワークショップの開催にあたっては、子どもや受益者の声を聴く観点からすでに事業実績のある、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、ワールド・ビジョン・ジャパンよりそれぞれご協力を頂き、講師派遣やその内容について調整を行った。

4. 活動内容

(1) 第 1 回ワークショップ 「オリエンテーション～受益者の権利配慮・総論～」

プロテクションに関する従来の NGO 研究会を踏まえ、受益者の権利配慮の必要性、国際的な動向、及び現場で事業を実施する NGO へ求められることについての概要を紹介する。

(2) 第 2 回ワークショップ 「子どもの声を聴く～子どもの権利に配慮した事業形成のあり方～」

セーブ・ザ・チルドレンより講師を招聘し、子どもの声に配慮した事業実施のあり方について、1 日かけたワークショップ形式で学ぶ。

(3) 第 3 回ワークショップ 「対立する両当事者の声を聴く」

受益者同士のグループ等が対立している場合、（例えば、紛争直後等で対立していた民族等）いかに両当事者の対立を助長しない形で事業実施を行うことができるか、支援により対立を深めないようにするか、Do No Harm の観点より、1 日かけたワークショップ形式で学ぶ。

(4) 第 4 回ワークショップ 「受益者への説明責任確保について」

国際的な NGO による受益者へのアカウンタビリティ確保の取り組みである Humanitarian Accountability Partnership (HAP、人道支援の説明責任プログラム) を紹介し、受益者の権利に配慮した事業実施のあり方について、一連の事業実施サイ

クルの中で学ぶ。

(5) 公開シンポジウム 「受益者の権利に配慮した事業実施のあり方」

海外から現場の実践を経験しているゲストを招聘し、日本側からも NGO 代表などがパネリストとして参加し、公開シンポジウムを開催する。

5. 実施スケジュール

2009 年 9 月 7 日 (月)	第1回ワークショップ 「オリエンテーション～受益者の権利配慮・総論～」
10 月 2 日 (火)	第2回ワークショップ 「子どもの声を聴く～子どもの権利に配慮した事業形成のあり方～」
12 月 2 日 (水)	第3回ワークショップ 「対立する両当事者の声を聴く」
2010 年 2 月 25 日 (木)	第4回ワークショップ 「受益者への説明責任確保について」
2 月 26 日 (金)	公開シンポジウム 「受益者の権利に配慮した事業実施のあり方」
3 月	報告書作成・提出

■第2章 各回ワークショップの報告

1. 第1回ワークショップ

「オリエンテーション～受益者の権利配慮・総論～」

▼実施枠組み

- ・日時：2009年9月7日（月）14:00～16:00
- ・場所：特定非営利活動法人 ADRA Japan（1階 会議室）
- ・目的：
 - －現場で事業を実施する NGO に求められる、受益者の権利配慮の必要性、国際的な動向についての概要を紹介する。
 - －今年度の NGO 研究会の趣旨や全体像を概観する。
- ・ファシリテーター：石川 えり 難民支援協会 事務局長
石井 宏明 難民支援協会 事務局次長
- ・参加者：10名（NGO スタッフ等）
- ・プログラム：
 - －参加者からの本研究会に対する期待、現場の声
 - －オリエンテーション①（受益者の権利配慮に関する動向について）
 - －オリエンテーション②（難民支援活動の事業実施と本研究会の全体像）
 - －ディスカッション

▼概要

まず、第1回目の研究会であるため、参加者から受益者の権利配慮について学びたい点や現場で課題と感じたことなどが挙げられた。

次にファシリテーターの石川えりより、オリエンテーションと題して報告がなされた。報告の内容は主に2部に分かれ、まず第1部では受益者の権利配慮に関する動向の整理および説明がされた。第2部では、これまでの難民支援協会の事業実施における、受益者の権利配慮の実践、また課題を紹介し、今年度実施する研究会の全体像を概観した。

第1部の権利保障における動向については、プロテクションとは受益者の権利が国際的に確立されている条約及び基準にのっとって保護されるよう確保する活動であると定義し、

大きな流れとして、①受益者の権利を中心に据える **Rights Based Approach**（「権利に基づくアプローチ」）の流れ（NGO による事業内容の質を上げていこうという積極的な取り組み）と、②ジェンダーに基づく暴力を廃止するという 2 点で捉えられることを確認し、それぞれの議論の発展等を説明した。

第 2 部の難民支援協会での事業実施については、パキスタン大地震、スワジランドにおいてプロテクション関連事業に従事した経験から、受益者の権利を確保するための、とりわけ弱者層とされる子ども及び女性などの声を聴くことの重要性とその難しさが紹介され、今回の研究会の背景及び趣旨と併せて説明された。例えば、パキスタン大地震の際は男性と女性が同じ会議に参加することが困難なことにより、配偶者を失い家長となった女性のニーズ等を聞き取ること等が難しく、また、夫以外の男性と話すことがないことを理由に、女性のソーシャルワーカーを確保したことを紹介し、スワジランドにおける子どものニーズを聞き取るための試行錯誤が紹介された。

最後に、参加者によるディスカッションが行われ、南スーダン等、それぞれの経験したフィールドでの経験を踏まえて、プロテクションを実施していく中で感じた課題が述べられた。また、南スーダンにて事業実施をしていた参加者から、プロテクションの視点を盛り込むことをパートナーの国際機関より提案され、試行錯誤して今回の研究会で紹介する **Humanitarian Accountability Program**（HAP、人道援助の説明責任プログラム）のスタンダードへ行き着いた経緯が紹介され、本研究会への期待が述べられた。

2. 第2回ワークショップ

「子どもの声を聴く～子どもの権利に配慮した事業形成のあり方～」

▼実施枠組み

・日時：2009年10月2日（金）10：00～16：30

・場所：神田公園区民館（3階和室）

・目的：

- －参加者が「子どもの参加」の概念を定義できるようになる。
- －「子どもの参加」の実施基準を確認できるようになる。
- －「参加」内容の権利を理解する。
- －2つのモデルケースについて説明できるようになる。
- －「子どもの参加」の利益と課題について説明できるようになる。
- －子どもや若い人たちを活動に巻き込むいくつかの方法を認識する。

・講師：ガイ・ケイヴ

セーブ・ザ・チルドレン・ミャンマー事務所 「教育と子どもの保護プログラム」 責任者

・参加者：21名（NGOスタッフ、医療関係者等）

・プログラム：

【午前】10：00～12：30

- －導入
- －子どもの参加の定義：子どもの声の傾聴を超えて
- －なぜ子どもの声を聴くのか？なぜ子どもの参加なのか？
- －安全で倫理的な子どもの参加

【ランチ】12：30～13：30

【午後】13：30～16：30

- －子どもの参加のモデル
- －手段と指標
- －ケース（ミャンマーのナルギスの子どもたちの評価、ミャンマーCP コンサルテ

- ーションとネパール・チャイルド・クラブ) とディスカッション
- ー参加者にできること
- ー評価

▼概要

1、子どもの参加の意味や重要性

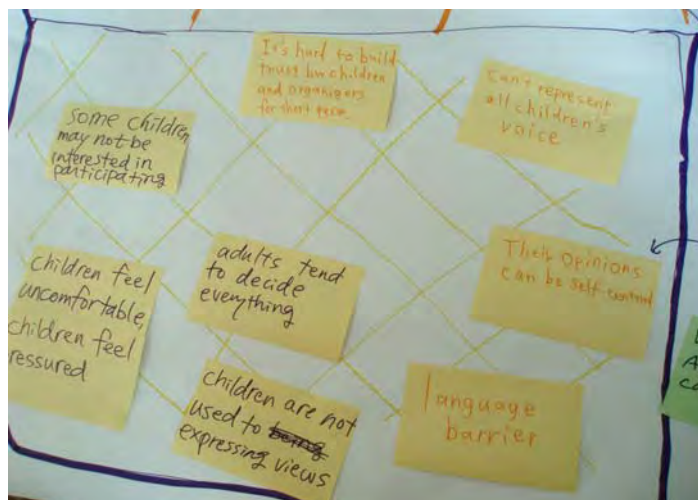
- ー歴史的に、子どもや若者はセーブ・ザ・チルドレンの受益者として、広く捉えられてきた。
- ー参加はただ「良いこと」ではなく、子どもの権利条約に明記されている「権利」である。
- ー子どもは容易に操作され、形だけの平等主義に利用されるが、これは避けなければならない。
- ーセーブ・ザ・チルドレンは子どもや若者にプログラムのサイクルや意思決定、管理に活発に参加してもらうことを目標としている。

2、子どもの参加の定義

- ー意見を表現し、目的達成のための意思決定に影響を与えられる機会を持つこと。
- ー最後尾に取り残されたり、年齢や能力の違いなど、いかなる問題をも含めた全ての子どもの情報に基づいた積極的な関与。
- ー作業の方法であり、全ての活動領域を横断する（家庭から政府へ、地域から国際社会へなど）重要な原則でもある。

3、「子どもの参加」の利益と障害

この項目については参加型のグループワークが行われた。大きな気球の絵を描き、球皮の部分に「子どもの参加」が与える利益を、バスケットの部分に障害を書き入れ、参加者から様々な意見が発表された。



4、子どもの権利条約

子どもの権利条約は下記の第 12 条の中で、意見を表明する権利を明確に表している。

「締約国は、自己の意見を形成する能力のある児童がその児童に影響を及ぼすすべての事項について自由に自己の意見を表明する権利を確保する。この場合において、児童の意見は、その児童の年齢及び成熟度に従って相応に考慮されるものとする。」

<子どもの権利条約の中核原則>

下の図のように、子どもの権利条約における 4 つの原則は相互に補完しあい、子どもの権利を実現するために必要不可欠な要素となる。



- (1) 子どもの最善の利益
- (2) 参加
- (3) 無差別性
- (4) 生存と発達

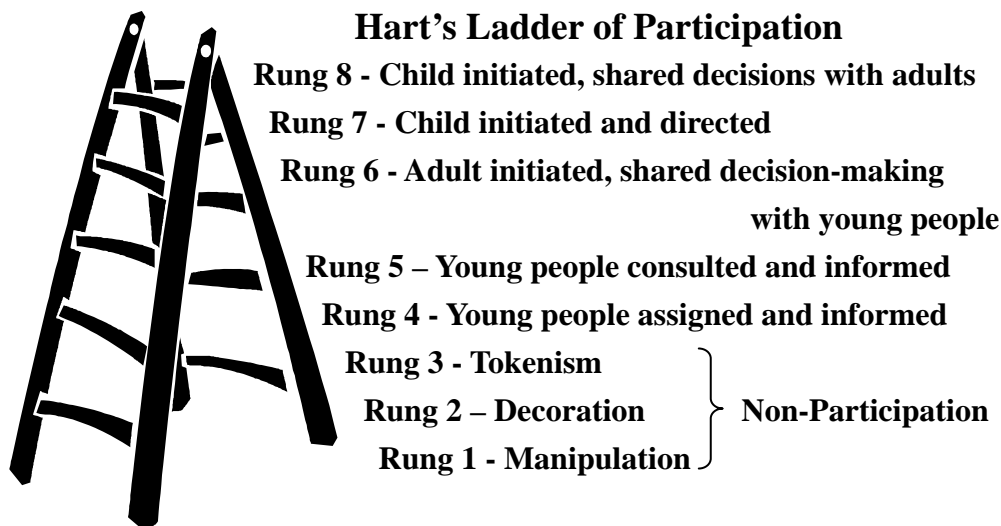
5、子どもの参加におけるセーブ・ザ・チルドレンの実施基準

下記の項目は、セーブ・ザ・チルドレンが子どもの参加を実施する際の実施基準である。これらの基準は、数年にわたる子どもの参加実施経験を通しての、スタッフからのフィードバックに基づいて作成されたものである。

- (1) 道徳的なアプローチ：透明性、公正であること、説明責任が伴う
- (2) 子どもの参加が意義のあるものであり、自発的なものである
- (3) 子どもにとって親しみやすく、自己実現が可能な環境にいる
- (4) 機会の公平性
- (5) スタッフが効率的で自信を持っている
- (6) 参加が子どもの安全性とプロテクションを促進している
- (7) フォローアップと評価を確実に実行している

6、参加の程度①(Roger Hart's Ladder of Young People's Participation)

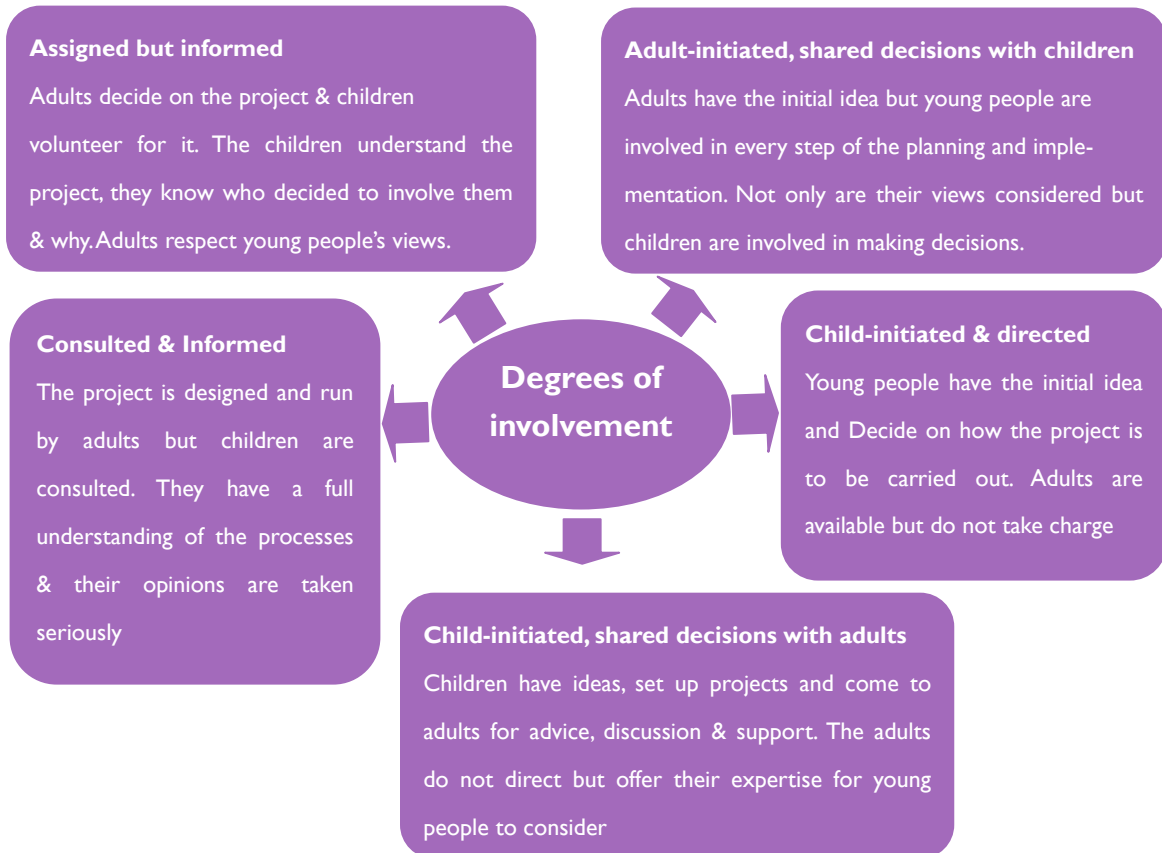
- ーよりよい子どもの参加を実施するためには、プログラム実施の中で子どもが置かれている状況や、実施方法などを客観的に評価することが必要となる。また、実施内容や子どもの成長段階、希望によって目標とするレベルが異なってくる。
- ー下記の図は子どもの参加がどの程度実現できているかを表すもので、上段のレベルへ上がるほど、子どもの参加が実現されていることになる。しかしレベル1～3までは参加とはみなされないとしている。
- ーワークショップの参加者は、子どもの参加実施において、子どもが置かれている8つの状況(例題)を与えられ、その状況がそれぞれどのレベルに属するのかをグループで議論した。



7、参加の程度②(Treseder's Degrees of Involvement)

- ー上記で取り上げた Hart のモデルは、参加を段階として説明し、最も高いレベルの参加が最もよいとしている。それに対し下記の Treseder のモデルは、重要度の等しい5種類の参加実践形を提示している。
- ーこのモデルでは、参加に段階や階級はなく、参加の形はそのときの状況(コンテキスト)や子どもたちの意思、成長段階、団体の所在地などによって決定される。
- ーこれらのモデルは、子どもたちや若者を傷つけたり彼らの不参加を助長したりするような「ごまかしの」「おかざりの」「見せかけの」参加は絶対に避けなければならないということを私たちに示している。私たちは、子どもたちが意義ある参加をなせるよう、適切な状況と機会を作らなければならない。

<Treseder's Degrees of Involvement>



8、意義ある参加とは何か (Meaningful Participation)

—子どもの参加が意義あるものになるためには、以下のような条件が必要である。このような条件を踏まえ、支援の現場においてどのような行動を取る必要があるか、参加者それぞれが考え、意見交換を行った。

- (1) 子どもや子どものアイデアが尊重される。
- (2) 参加の目的と結果が子どもたちに説明される。
- (3) 参加するかしないかを子どもたちが自発的に決定する。
- (4) (参加という)過程と経験を通じて、子どもたちに自信と権限を与えられる。
- (5) 子どもの年齢に応じた、楽しく、面白く、ひきつけられる方法が取られる。
- (6) 子どもたちの選択に沿った、そして子どもの成長に必要な機会を与えられる。
- (7) 子どもの参加が十分になされるまでには時間がかかることを踏まえ、プロジェクト企画の際に必ずそれに要する時間を計算に入れる。

第3回ワークショップ

「対立する両当事者の声を聴く」

▼実施枠組み

- ・ 日時：2009年12月2日（水）10：00～16：00
- ・ 場所：大久保地域センター（3階 会議室A）
- ・ 目的：
 - － 支援活動が受益者に与える影響を、様々な側面から考える。
 - － 「Do No Harm」の分析と支援プログラム構築のプロセスを理解する。
 - － 実際の支援プログラムについて分析し、「Do No Harm」の視点から、どう支援の改善策を検討する。
- ・ 講師：プラディープ・マハムトゥガラ
ワールド・ビジョン・インターナショナル アジア太平洋地域事務所
子どもと平和構築 地域アドバイザー
- ・ 参加者：13名（NGO スタッフ、団体職員等）
- ・ プログラム：
 - 【午前】10：00～12：30
 - － 導入：講師と参加者の自己紹介
 - － ケーススタディ（タジキスタンにおけるプログラムを基に）
 - － プログラム再構築のプロセス、「Do No Harm」の分析
 - 【ランチ】12：30～13：30
 - 【午後】13：30～16：30
 - － 「地域の平和維持能力」（LCP）の概要
 - － 選択肢作りの重要性
 - － 理論の応用

▼概要

1、タジキスタン紛争後の「Food for Work プログラム」に関する検討

ソビエト連邦崩壊後に勃発したタジキスタン紛争後に実施された「Food for Work プログラム」を基に、以下の検討作業を行った。

<タジキスタン紛争後の「Food for Work プログラム」について>

セーブ・ザ・チルドレンにより実施された復興プログラム。1990年代のタジキスタン紛争時に対立していたクルヤビ族とガルミ族の融和を図るとともに、紛争で家を失った両民族の復興を助けることを目的として実施された。具体的には、両民族に対して、紛争で崩壊した家屋の復興を依頼し、その労働に従事した者には報酬として食料を支給するプログラム。

ー実際の支援プログラムの概要を一見し、予想する効果について話しあった。

ー同プログラム実施後に、実際に起きた問題（民族間の対立など）について学んだ。

ー同プログラムの中で、何が対立する民族間を繋ぐ要素になり、何が引き離す要素になるか検討した。

（例：法秩序、共有する価値＝民族を繋ぐ要素、政治的イデオロギー、異なるアイデンティティ＝民族を引き離す要素 など）

2、プログラム再構築のプロセスとしての（「Do No Harm」分析）の検討

ー実際のケーススタディに関する検討を行った上で、理論的に「Do No Harm」について学習した。

ー段階的アプローチについて、下記の点を確認した。

- (1) 対立・紛争の原因を明確にする。
- (2) 上記の対立グループ間の結束・共存を促す要素を明確にする。
- (3) 支援プログラムの内容を明確にする（なぜ、何を、どのように、誰と、誰が、いつ）
- (4) 上記項目について、以下の2点からチェックする。
 - ① プログラムがどのようにグループ間の対立・紛争を悪化または改善させるか。
 - ② プログラムがどのようにグループ間の結束・共存を促すまたは弱めるか。
- (5) 悪影響の可能性が低く、良い影響を与える可能性が高いプログラムを作成するために、他に選択肢がないか確認する。
- (6) 状況の変化に合わせて定期的にプログラムをチェックし、上記のプロセスを繰り返す。

3、「地域の平和維持能力」(「Local Capacities for Peace(LCP)」)の検討

- －LCP のコンセプトについて学習し、これらのコンセプトに基づき、支援プログラムの構築方法について学んだ。
- －LCP とは、紛争を予防・抑制・中和することができる個人または社会レベルの要素であり、法律、警察、教会、市民団体などを指す。
- －⇔「戦争を引き起こす能力」、「Capacities for War」または「Dividers」とも言える。
- －LCP と Capacities for War を分類する 5つのカテゴリーは下記のとおりである。

- (1) 社会システム・制度
- (2) 個人・グループレベルの態度・行動
- (3) 共通する価値観・利益
- (4) 共通の経験
- (5) 国旗、音楽、絵画などのシンボル、祝日

4、選択肢作りの重要性

- －支援プログラム構築の手法について学んだ上で、以下のグループワークを行った。
- (1) 支援を必要とする架空の状況を設定し、制限時間内に出来るだけ多くの支援の選択肢について話しあい、発表した。
- (2) 選択肢を増やすためには常識に縛られない創造性が必要であることを認識した。

5、理論の応用とグループ発表

- －ワークショップで学んだ理論を用いて、実際の「Food for Work プログラム」の改善案についてグループで検討し、発表した。

4. 第4回ワークショップ

「受益者への説明責任確保について」

▼実施枠組み

- ・ 日時：2010年2月25日（木）10：00～16：30
- ・ 場所：JICA 地球ひろば（2階 セミナールーム 202）
- ・ 目的：
 - Humanitarian Accountability Partnership（HAP、人道支援の説明責任プログラム）の定義やコンセプトを理解する。
 - なぜ HAP が重要なのかを理解する。
 - 説明責任に関する国際基準の要点を学ぶ。
 - 人道支援の現場において、受益者に対してどのように説明責任を果たすのか考え、実践できるようになる。
- ・ 講師：アレクサンドラ・M・レヴァディティス
ワールド・ビジョン・インターナショナル シンガポール事務所
「人道援助の説明責任プログラム」副代表
- ・ 参加者：9名（NGO/NPO スタッフ、大学教員、開発コンサルティング会社社員等）
- ・ プログラム：
 - 【午前】10：00～13：00 <説明責任の理論>
 - 導入：講師と参加者の自己紹介
 - 受益者への説明責任の意義
 - 説明責任の原則・基準
 - 説明責任に関する NGO の取り組み：「HAP」と、マニュアル「Good Enough Guide」の紹介
 - 【ランチ】13：00～13：50

【午後】13:50～16:30 <説明責任の実践>

- －説明責任に関する NGO の取り組み 続き
- －説明責任の実践：ワールド・ビジョンの活動（ミャンマーにおけるサイクロン被害、スリランカにおける津波被害、ハイチ地震被害等への支援）を例に
- －説明責任の実践方法
- －評価

▼概要

1、受益者への説明責任の意義

－参加型グループワーク「バスサービス」：

バスが数時間も説明なしに遅延したり、席が不足することにより、乗客がパニックを起こして運転手とトラブルを起こす、しかしバス会社や運転手は乗客との話し合いやトラブル対応に真摯に取り組もうとしない、といった状況を想定した上で、この後さらに起こりうることは何か、なぜこのような状況が起こってしまったのか、人道支援の現場や NGO の活動と関連させて考えた場合どういった対応が必要か、についてグループ内で話し合った。



－意見交換の中では、トラブルの原因として、情報が正確に伝達されていないこと、バス会社や運転手と乗客との間に大きな権力の差があること、バスは一便しかなく乗客に選択肢がないこと、バス会社が占有状態であるため車内サービス向上のインセンティブを持たないこと、バスサービスの基準やモニタリング機能が整備されていないことなどが挙げられた。



－NGO と受益者との間にもこれと同様の問題が生じやすいことを確認した。

2、説明責任の原則・基準

－参加型グループワーク「水の配分」：

複数人がひとつの部屋に水 1 本で 24 時間閉じ込められる状況を想定し、その 1 本の水をどのように各人に配分すべきかを考えた。

－参加者からは、目盛りを書き入れる、誰がどれくらい飲んだかをチェックするシートや管理システムを作る、老若男女等の個人差を考慮して水の配分を公正に差別化する、個々人の宗教や信念を尊重するなどといった意見が出された。

ーグループワークでの議論を踏まえ、実際に赤十字社が作成した国際行動基準「The Code of Conduct」で説明責任の基準を確認しながら、自分たちや所属する団体ではどの基準をどの程度重視しているのか、どのように実践しているのかについてディスカッションを行った。



3、説明責任に関する NGO の取り組み

説明責任に関する国際 NGO の様々な取り組みに関して、NGO 自身による受益者等への説明責任確保の取り組みである『Humanitarian Accountability Partnership HAP』と、それにより作成された説明責任のマニュアルである『Good Enough Guide』等についての紹介がなされた。

4、説明責任の実践：ワールド・ビジョンの活動を例に

ーワールド・ビジョンでは、以下のような構成で説明責任の実践を行っており、メンバーのサイクロン復興支援活動やスリランカの津波復興活動、ハイチ大地震支援活動では具体的に次のような活動を行った。

(1) 透明性の確保

委任された権限（マンドート）や活動目的、受益者と権利の基準、実施報告において透明性を持つ。

例）村の掲示板を使った広報と活動報告

(2) 受益者との協議

受益者の合意を得るため、支援活動開始直後から権利について受益者と協議する。

例）住民集会や意見交換会の開催、住民自ら復興に参加し協力しあうようにするための自発的促進的な集会内容

(3) 支援に対するフィードバック

受益者からの反響やクレームをもとに、事業を是正するための体制を作る。

例） 地域の実情に即した手段で受益者の意見・不満を集める（手紙、電話、Eメール、面談、聞き取り調査、複写式シートなど）、全ての住民が人道支援への意見・不満を自由に書いて投函できる意見箱（Suggestion Box）の設置、投函されたフィードバックへの対応

(4) スタッフの能力向上

例） 団体職員や現地スタッフに対する団体の理念や説明責任基準の周知徹底、

説明責任・ガイドブック（『Good Enough Guide』や『Humanitarian Accountability Team HAT』を作成した実務者のための責任説明の手引き）
の携帯・常時参照

(5) 継続的な向上のための学習

支援団体の支援内容やマネジメントを質的に向上し続けるための学習を続ける。



5、説明責任のあるべき実践方法

- 説明責任のあるべき実践方法について、グループワークと発表を行った。
- 最後に、個人や活動団体として説明責任を短・中・長期的にどのように実践していくべきかについて参加者全員が個別にワークシートに取り組み、ワークショップを終了した。

■第3章 公開シンポジウム

「受益者の権利に配慮した援助活動のあり方」

▼実施枠組み

- ・ 日時：2010年2月26日（金）14：00～17:00
- ・ 場所：女性と仕事の未来館 4階ホール
- ・ 目的：
受益者の声を反映させた事業実施のあり方などについて考えるため、NGO 自身による受益者等への説明責任確保の取り組みである Humanitarian Accountability Project (HAP、人道支援の説明責任プログラム) の取り組みを紹介しながら、これまでのワークショップの成果を広く共有する
- ・ 参加者：37名
- ・ プログラム：
 - 【開会挨拶】14：00～14：10
澤村 広樹 外務省 国際協力局 民間援助連携室 外務事務官
 - 【基調講演】14：10～14：55
「説明責任と受益者の関連性－HAP の導入」
アレクサンドラ・M・レヴァディティス
ワールド・ビジョン・インターナショナル シンガポール事務所
「人道援助の説明責任プログラム」副代表
 - 【パネルディスカッション】15：00～16：20
「受益者の声を聴く－現地の事業における課題と機会」

＜パネリスト＞
定松 栄一 社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
事務局次長兼事業部長
織田 靖子 国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）、国際協力機構（JICA）
援助協調シニア・アドバイザー

石川 えり 特定非営利活動法人 難民支援協会 事務局長
日本へ逃れてきたビルマ（ミャンマー）難民女性

<モデレーター>

坂 賢二郎 特定非営利活動法人 ワールド・ビジョン・ジャパン
海外事業部 緊急人道支援課 課長

【休憩】16：20～16：30

【質疑応答】16：30～16：55

【閉会挨拶】16：55～17：00

石井 宏明 特定非営利活動法人 難民支援協会 事務局局長代行

<総合司会>

ヒョン・スージン 特定非営利活動法人 難民支援協会 渉外部
プログラムオフィサー

▼講師・パネリスト・モデレーター プロフィール

講師

アレクサンドラ・レヴァディティス Alexandra Levaditis

ワールド・ビジョン・インターナショナル シンガポール事務所

「人道支援の説明責任プログラム」副代表

2004～05 年、ワールド・ビジョン、アメリカ事務所に勤務。ワールド・ビジョン初の試みとなる、「人道支援説明責任チーム」において、スリランカの津波被災者支援に 2 年半従事した。また、緊急人道支援課に勤務していた際には、開発プログラムにおいて説明責任（説明責任）が推進されるよう努めた。現在は「人道支援の説明責任プログラム」副代表として、説明責任が支援組織の事業やガイドライン、現地でのプログラムに取り入れられるよう、活動している。

モデレーター

坂 賢二郎 Kenjiro Ban

特定非営利活動法人 ワールド・ビジョン・ジャパン 海外事業部 緊急人道支援課 課長

大学院修了後、一般企業に勤務。2000 年 12 月より外務省 NGO 専門調査員としてワールド・ビジョン・ジャパンにて勤務。2001 年 8 月より 2 年間、国連ボランティアとしてケニアに派遣、主に現地の難民支援事業に従事する。2003 年 11 月から再びワールド・ビジョン・ジャパンにて緊急援助を担当。紛争地での人道支援、戦後復興、また地震や津波などの自然災害などの発生に際して事業形成や実施を主に行っている。

パネリスト

定松 栄一 Eiichi Sadamatsu

社団法人 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 事務局次長兼事業部長

日本赤十字社国際部（1984～1992 年）、シャプラニール＝市民による海外協力の会（1992～2000 年）を経て、2003 年より 6 年間セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンでネパール事務所長を務める。ネパールでの子どもたちとの交流から、子どもたちが時としておとな以上に社会への影響力を持つことに気付かされ、彼らを単に受益者とみなすだけでなく、社会変革の担い手として捉えることの重要性を認識する。2009 年 2 月より現職。

織田 靖子 Yasuko Oda

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）、国際協力機構（JICA）

援助協調シニア・アドバイザー

鐘紡株式会社本部国際部（大阪）勤務の後、青年海外協力隊（マラウイ）、世界食料機構（WFP）イラク、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）ザンビア、モザンビーク、エチオピア、旧ユーゴスラビア、スイス（本部）を経て、2007 年よりシニア・アドバイザーとして国際協力機構（JICA）に出向中。

石川 えり Eri Ishikawa

特定非営利活動法人 難民支援協会 事務局長

上智大学卒業後、IT 出版社等で勤務。難民問題にはルワンダの内戦等を機に関心を深めた。難民支援協会には設立準備会よりボランティアとして関わった後、職員となった。現在は事務局長として、渉外・個別支援を中心に組織を統括する他、難民保護に関して国内での講演等も行っている。移民政策学会理事。

▼概要

1、基調講演 アレクサンドラ・M・レヴァディティス

「説明責任と受益者の関連性－HAP の導入」

－援助機関が行う受益者への説明責任の必要性、説明責任の理論、国際基準、実践についての説明



－説明責任（アカウンタビリティ）とは？

- ・援助する側に対して受益者が意見を述べる権利と、援助側が負うそれに対応する義務のこと

－なぜ説明責任が必要なのか？

- ・人道支援機関は「独特」である。すなわち、支援機関が「サービス」を提供している「客＝災害等の被災者」は、支援機関の活動に対して影響力を持たないと同時に、その機関に対してクレームを言う手段がない
 - このような支援する側とされる側のパワーバランスの不均衡を見直し、援助機関が「どのように」援助していくか
 - 援助する中で「何を」提供したかよりも、「どのように」受益者との関係を構築したかを重要視する考えが「説明責任」

－説明責任の国際基準としては、赤十字の「The Code of Conduct」や「Good Enough Guide」があり、NGO による国際基準作りの取り組みとしては「Humanitarian Accountability Partnership(HAP)」や「The Sphere Project」がある

－人道支援の現場における説明責任の取り組み：

透明性の確保、受益者との協議、フィードバック、スタッフの能力向上、援助担当者の学習



2、パネルディスカッション

(1) 定松 栄一「子どもの声を聞く」



ーなぜ子供の声を聞かなければならないか？

- ・それが子どもの権利であるため
 - 子どもの権利条約 12 条「意見表明権」は、子どもを権利主体として捉えている
 - 「大人が子どもの声を聞く気がない」、「子どもたちが意見を言えない、言う術がない」といった状況を回避しなければならない
- ・子どもが何を必要としているかは、子どもが最も良く知っており、子どもの見解はしばしば大人の見解とは異なる（「教育」や「学校に必要なもの」に対する、大人と子どもの意見の相違など）
- ・子どもは大人以上に強力な社会変革の担い手となり得るから（問題の本質を突く指摘、大人たちを驚かせるような創意に満ちたアイデアなど）

ー子どもたちの行動例

- ・子どもたちが自ら募金活動を行い、親や教師に不足部分を補うよう協力を求めた
- ・デモ行進をして親に教室の修理をさせた

ー子どもの声を聞く方法

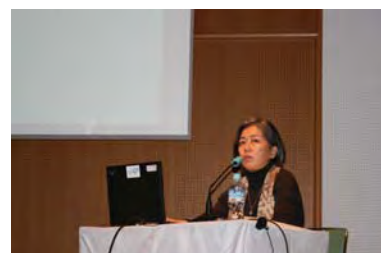
- ・子どもがお互いに自由に意見を言える環境を作り、子どもたち同士で助け合えるような場を作る（例：子ども会、識字教室）
- ・子どもたちとの信頼関係を作る
- ・子どもたち自身で考えるよう励ます
- ・子どもたちのアイデアを活かすようおとなに働きかける

(2) 織田 靖子「受益者の権利に配慮した援助活動のあり方—紛争影響地域における

受益者の声を聴く—国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) と国際協力機構 (JICA) の経験から—

ー言葉の定義

- ・「紛争影響地」とは
 - 紛争中、紛争直後、紛争周辺地域
- ・「受益者」とは
 - 紛争直接責任者以外すべての人々を想定
- ・「声を聴く」とは
 - 直接、間接、Observation（実際に見る事）



ー紛争影響地域は今と昔で何が変わったのか

- ・紛争の激化、紛争地における支援機関職員の犠牲が増加、Humanitarian Space（人道支援可能地域）の減少

ーなぜ状況が変わったのか

- ・第二次世界大戦以降構築されてきた、「国家」間の関係中心の国際法の枠組みが限界をむかえている（テロをはじめとする非国家当事者による紛争、「人間の安全保障」概念の台頭など）

ー援助のあり方について過去から学ぶこと

- ・紛争後のモザンビークにおける社会調査の結果：復興初期における最も役立った支援は「食糧援助」であった
- ・紛争終結当時、国連や国際援助団体がいてくれてよかった。それはお金や物資を提供しただけでなく、政府と反政府両方の地域に入ることができたから

(3) 石川 えり「プロテクションを中心とした事業の実践～難民支援協会の活動を通じて～」

ー日本国内外（パキスタン 06 年、スワジランド 08 年、日本）でのプロテクションを中心とした事業の概要を紹介した



ーパキスタンでの取り組み

- ・立場の弱い被災住民（女性）へのエンパワーメント
- ・支援関係者へのワークショップ

ースワジランドでの取り組み

- ・水・衛生
 - 新規井戸設置、井戸修復、保健衛生トレーニング実施
- ・フード・セキュリティ
 - 種子・農具および点滴灌水キットの配布、農業トレーニング実施
- ・脆弱者
 - 脆弱者プロファイリング、NCP 建設、管理運営者トレーニング実施

ー難民支援協会の国内での活動

- ・難民認定を受けるまでのサポート
- ・セーフティーネットの確保

ー支援面での課題、支援の拡充

- ・ヒアリングをしきれていない女性へのアプローチ強化
- ・難民を受けた後の定住支援（日本語教育、スキルアップ、妊娠・出産等ライフステージにあわせた対応）やコミュニティ支援の重要性

(4) 日本へ逃れてきたビルマ(ミャンマー)難民女性

「日本で難民申請をしたときの苦労とそれをどうやって解決したかービルマから日本へ逃れてきた難民としての私の経験」

ー難民としての苦しい経験から、支援者を信頼することがはじめは難しかった。しかし、JAR 職員をはじめとする日本人と何度も会い話をする中で、真摯に支援しようという意思が伝わり、信頼をして何でも話せるようになった。

ーサポートをする側とされる側との信頼関係の重要性。



3、質疑応答

【質問】 障害を持つ子どもの声はどのように聴けばよいか？

【回答】 定松：障害をはじめとした、社会的に排除される傾向にあるグループの子どもの声を聴くためには、「そのような子どもたちの声を聴きたい」という要求を、支援を担当する側から声を出していく必要がある。そのような子どもたちの存在を知っているのも子どもたちである。また、信頼関係がないと、障害や差別といった難しい問題についての話を聴くことができない。子どもの声を学校だけが聴くのではなく、地域の人が聴くことで、社会性が生まれる。

【質問】 プロテクションの対象となる脆弱者に対して、援助対象者はどのような分野横断的対応をとるべきか？

【回答】 石川：それぞれのクラスターの担当者（食糧配給等）に対して、脆弱者が支援から漏れないように注意を喚起する。

【質問】 紛争地において日本として、JICA としてどのような活動を行うべきと考えるか？

【回答】 織田：日本の活動の強みを生かした支援をすべきである。

【質問】 政府によるトップダウン、国益重視の援助方式に対し、NGO としてどのように対処していけるのか？

【回答】アレクサンドラ：国連や各国政府の人道支援政策においても、説明責任やフィードバックのシステムの重要性は認識されつつある。我々のような NGO が更なる実践を積み重ねることや活動の透明性を高めることで、政府・国連機関へ影響を与えることができるのではないかと思います。日本政府もこれらの活動について関心を持ってくればと思います。

【質問】説明責任について日本ではどのようなツールを使っているのか？

【回答】石川：HAP や意見箱のような、フィードバックを受ける体系的なツールやシステム作りは出来ていない。制度としては、一人ひとりとのカウンセリングを重要視しているため、10 カ国以上の通訳者を用意している。



4、パネリストの所感

【定松】

- ・個々の受益者の声をいかに「システム」にしていくか、そしてその「システム」をいかに形骸化させないかが重要である。
- ・とかく忘れがちになってしまう、子どもたちの声を聴くことの重要性を、他の NGO にも積極的にアピールしていきたい。

【織田】

- ・「国家」の枠組みからの脱却、市民社会の活性化が望まれる。
- ・日本社会は全体的に人道支援に対して「他人事」な感覚があるのではないかと。

【アレクサンドラ】

- ・自らの経験からも、子どものほうが子どもをより理解していることに気づいたので、子どもたちへの説明責任、子どもたちからのフィードバックを大切にしたい。
- ・日本の NGO は、説明責任に関するツールやシステムの翻訳や導入を早急に進めるべきである。

【石川】

- ・「説明責任」というと、ドナーに対する説明責任ばかり考えてしまうが、まだ日本で注目を集めていない受益者への説明責任の重要性を感じ、日本でもっと広めていかないといけないと思った。
- ・JAR が支援してきた難民（受益者）はこれまでに 2000 人を超えているが、その全員と

信頼関係が築けているわけではない。フィードバックを受ける手段が未だ用意されていないことが課題である。

- ・ HAP の評価点は、説明責任理論を体系化したことと、NGO がイニシアティブを取って取りまとめていることである。日本の NGO もこれを見習って取り組み始めるべきである。

【難民女性】

- ・ 難民たちも支援してくれた日本人に感謝している。日本人と難民が共に日本や世界の平和について歩んでいけたらと思う。
- ・ 子どもを持つ身として、大切な子どもたちの声を聴くことの必要性を痛感した。

■別添資料

1. 第 1 回ワークショップ 「オリエンテーション～受益者の権利配慮・総論～」
2. 第 2 回ワークショップ 「子どもの声を聴く～子どもの権利に配慮した事業形成のあり方～」
3. 第 3 回ワークショップ 「対立する両当事者の声を聴く」
4. 第 4 回ワークショップ 「受益者への説明責任確保について」
5. 公開シンポジウム 「受益者の権利に配慮した援助活動のあり方」

第1回ワークショップ

「オリエンテーション～受益者の権利配慮・総論～」

＜パワーポイント資料＞

オリエンテーションの目的

- 受益者の権利配慮に関する動向を整理・共有する。
- これまでの事業実施における実践・課題を紹介し、今年度実施する研究会の全体像を概観する。



外務省NGO研究会「受益者の権利に配慮した援助活動のあり方」

第1回:オリエンテーション ～受益者の権利配慮・総論～



外務省NGO研究会
「受益者の権利に配慮した援助活動のあり方」事務局
特定非営利活動法人 難民支援協会

国際的に確立している条約・基準

- 国際人権法／すべての人の尊厳を確保する
✓ 世界人権宣言、主要人権条約(子どもの権利条約等)
- 国際人道法／武力紛争時の法
- 国際難民法／難民を迫害の待ち受ける出身国へ送り返さない

プロテクションとは？

- 受益者の権利が国際的に確立されている条約及び基準にのっとって保護されるよう確保する活動【2つのコンセプト】
 1. Rights Based Approach
 2. GBV(性に基づく暴力)の防止

これまでのプロテクションに関する取り組み 【コンセプト】 2. GBV

- Gender Based Violenceの略
✓ 身体的、精神的、又は性的危害もしくは苦痛を加える行為、かかる行為の威嚇、強制、及び、その他の自由の剥奪を含む。(女性差別撤廃委員会)
- GBVの例
 - ✓ Sexual violence
 - ✓ Physical violence
 - ✓ Emotional and psychological violence
 - ✓ Harmful traditional practices (FGMを含む)
 - ✓ Socio-economic violence

これまでのプロテクションに関する取り組み 【コンセプト】 1. Rights Based Approach

- 90年代後半より主に開発の文脈で多く語られてきた
- 国連による定義「人権に基づく開発に対するアプローチとは、規範的に国際人権基準に基づき、実践面で人権と保護につながる人間開発の過程のための概念的枠組み」(OHCHR2006:15)
- 特徴
 - ✓ ニーズから権利へ
 - ✓ 包括(inclusion)一普遍性、不可譲、非差別、平等
 - ✓ 権利保有者と債務履行者
 - ✓ 参加と説明責任

(川村曉雄、「人権基盤型アプローチの射程」より)

これまでのプロテクションに関する取り組み 【ガイドライン】 プロテクション

- Sphere Standard【→改定についての動きを報告】
- プロテクション ガイドライン(2006年度)
- プロテクション フィールドガイド(2007年度)

これまでのプロテクションに関する取り組み 【実施スキーム】 クラスターアプローチ

- 2005年12月より実施。
人道・緊急支援、およびそこからより持続可能な開発援助へのトランジションのフェーズにおける各機関の役割をクラスター(セクター)ごとに明確化することで、アカウンタビリティと透明性を高めてより効果的な支援を目指そうとするアプローチ
 - ✓ Child Protection (UNICEF)
 - ✓ Gender-Based Violence (UNFPA/UNICEF)
 - ✓ Housing, Land and Property (UN-Habitat)
 - ✓ Mine Action (UNMAS)
 - ✓ Rule of Law and Justice (UNDP/OHCHR)
 - ✓ Working Group on Protection in Natural Disasters

(Global Protection Cluster Working Group ウェブサイトより)

日本における取り組み

外務省NGO研究会として

- 2006年度「人道支援におけるプロテクション」:プロテクションの総論を議論、とりわけ「支援の中で周辺化されやすい弱者」の認識
- 2007年度「人間の安全保障におけるプロテクション」:各セクター/クラスターにおけるプロテクションの実践について議論



これまでのプロテクションに関する取り組み 【ガイドライン】 GBV

- Guidelines on Gender-Based Violence Interventions in Humanitarian Settings (IASC)
- Receiving and investigating allegations of abuse and exploitation by humanitarian workers (ICVA)

JARでの実践における具体例と課題

- パキスタン地震における対応
 - ✓ キャンプ内、帰還におけるプロテクション → 支援から周辺化される人の認識共有
 - ✓ GBVへの対応 → キャンプ内でのReporting Lineの確認



JARでの実践における具体例と課題

- スワジランド干ばつ支援におけるプロテクション
 - ✓ NCP建設におけるアセスメント → 教育システムの課題・施設へのアクセスの課題・子どもの声を聴くことの難しさ



今年度の計画

～受益者の声を聴く～をサブテーマに、プロテクションを実施する上での中心となる受益者への配慮を学ぶ。

WS2(10月2日): 子どもの声を聴く

WS3(12月上旬): 対立する両当事者の声を聴く

WS4(2月): 受益者の声を聞く～Good Enough Guide, HAPの紹介を中心に～

JARでの実践における具体例と課題

■ 国内の事業を通じて

- ✓子ども・女性が周辺化されている。 → ニーズが見えにくい。アクセスの課題(場所+夫の通訳なしに話せない)。エンパワメントの必要性。
- ✓コミュニティの中で対立がある場合への支援 → 支援をする上で対立を深化させない必要性。

第2回ワークショップ 「対立する両当事者の声を聴く」

<パワーポイント資料>

Listening to Children

Save the Children
2nd October 2009

Guy Cave



Aim: to introduce the concept, principles, practice standards, and examples of listening to children (child participation)

Introductions & Expectations

- Please introduce yourself, giving:
 - your name;
 - your organisation;
 - your role/position;
 - and your particular interest in today/1 thing you want to get from this workshop



Learning Outcomes:



Learners will be able to:

- Define the concept of listening to children/child participation
- Identify practice standards on children's participation
- Understand the rights context for participation
- Outline 2 models of participation
- Outline benefits and challenges of child participation
- Identify some ways to involve children and young people in their work



When you were a child...

- In pairs, discuss things from your childhood: e.g. things you liked to do, where you lived, things you experienced etc.
- Find something (anything) that the two of you have in common
- Now join with another pair, so there are 4 of you, and discuss again, finding something that all four of you have in common.
- (Now join with another four, and find something that all 8 of you have in common from your childhood.)



Setting the context for listening to children

- In your group of 4, choose one or two of the statements – discuss them, arguing both for and against
- We will ask you to share 2 reflections from your discussion, e.g. think about:
 - How does your discussion impact on the work of your organisation?
 - What are the challenges for listening to children given the view points discussed?
 - What could be done in response to some of the concerns discussed?

Plenary: What are your reflections on this?



Some reflections

- It is not just about listening to children, they need information, their views need to change things
- Need to provide meaningful opportunities for young people to participate.
- Need to plan participation for children carefully, safely and ethically.
- Need to provide support and training for young people.
- The attitudes of adults are often barriers to participation.
- Sometimes it is not appropriate for children to participate.
- Not all children are ready to participate in all opportunities.



Some more reflections

- Historically children and young people have been seen largely as beneficiaries of Save the Children's work.
- Participation is not just a nice to do thing, it is a right of children as outlined in the United Nations Convention on the Rights of the Child.
- Children can be manipulated and used in a tokenistic way and we must avoid this.
- Save the Children aims for children and young people to actively participate in the programme cycle, decision making and governance.



Save the Children's definition

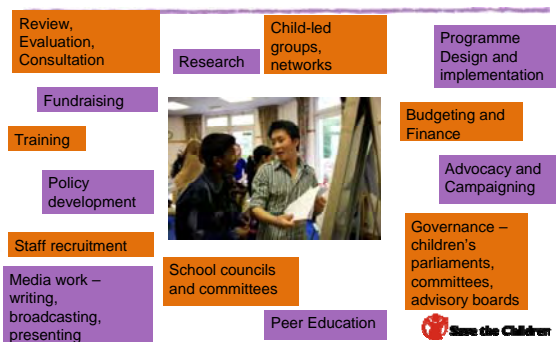
Child Participation...

- is about having the opportunity to express a view, influencing decision-making and achieving change.
- is the informed and willing involvement of all children, including the most marginalised and those of different ages and abilities, in any matter concerning them
- is a way of working and an essential principle that cuts across all arenas – from homes to government, from local to international levels



9

Examples of participation



Benefits and Barriers to Child Participation

- What came up at first workshop about reasons for listening to beneficiaries?
- In 4 groups, try to float the hot air balloon with the benefits and barriers to listening to children/child participation



What are the benefits?

- Leads to better decision-making and outcomes
- Embodiment of values and accountability
- Organisational learning from children and young people – staff enhance their skills
- Better informed responses to issues facing children
- Increased credibility and accountability



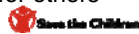
12

What are the benefits to children?



- Contributes to young people's personal development
- Opportunities to bring about positive change
- Increased motivation
- Serves to protect children – greater awareness of rights
- Promotes children's capacities for civic engagement, tolerance and respect for others

13



What are the challenges?

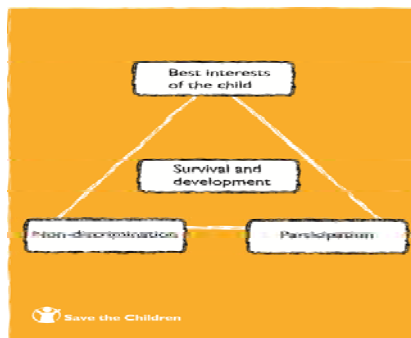


- Adults not wanting to share decision-making power with children
- Adults lack the skills, attitude and knowledge to work in a participatory way with children
- Adults view children as beneficiaries, not as equal stakeholders
- Not wanting to burden children with complex and daunting issues
- Non child-friendly environment

14



Core principles of the UNCRC



Save the Children

What are the participation rights of children?

- Activity sheet in pairs



Participation in the UNCRC



Article 12 of the UN Convention of the Rights of the Child relates specifically to participation:

'State parties shall assure to the child who is capable of forming his or her own views the right to express those views freely in all matters affecting the child, the views of the child being given due weight in accordance with age and maturity of the child.'

17



Non Participation Rights...

- **Article 37** – all children should be protected from torture and cruelty and inhumane or degrading treatment
- **Article 35** - all children should be protected from being sold, abducted and from trafficking
- **Protection rights, not participation rights**

18



Save the Children's Practice Standards

- **Standard 1:** An ethical approach: transparency, honesty and accountability
- **Standard 2:** Child participation is relevant and voluntary
- **Standard 3:** A child-friendly, enabling environment
- **Standard 4:** Equality of opportunity
- **Standard 5:** Staff are effective and confident
- **Standard 6:** Participation promotes the safety and protection of children
- **Standard 7:** Ensuring follow-up and evaluation



Safe and Ethical Participation

- Child Safeguarding Policy and Procedures
- Safe Child Participation
 - Ethical
 - Risk Assessment
 - Consent
 - Child Protection



Degrees of Involvement

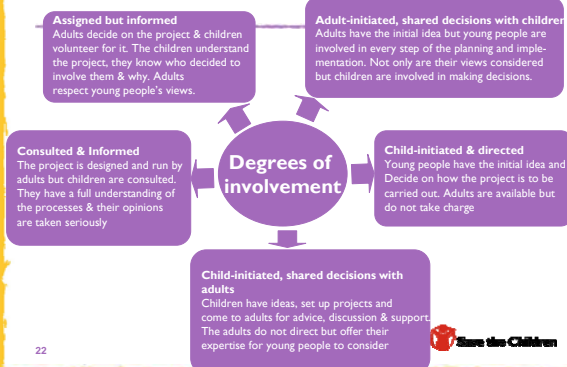


Hart's Ladder of Participation

- Rung 8 - Child initiated, shared decisions with adults
- Rung 7 - Child initiated and directed
- Rung 6 - Adult initiated, shared decision-making with young people
- Rung 5 - Young people consulted and informed
- Rung 4 - Young people assigned and informed
- Rung 3 - Tokenism
- Rung 2 - Decoration
- Rung 1 - Manipulation



Degrees of Involvement



Meaningful Participation



Participation is made meaningful when....

- Children and their ideas are treated with respect
- The aims and outcomes of involvement are explained to children
- Children volunteer to participate – or decide not to!
- The process and experience builds confidence and self-esteem and is empowering
- Child friendly (depending on age) methods are used – make it fun, interesting and engaging
- Providing an opportunity that suits the development needs of the child, and is in line with what children chose
- Factoring time into project planning – it takes time to do participation well! It shouldn't be a one off event



How to do child participation

- In groups, draw a person's body on a piece of flipchart paper – draw it as big as possible
- Now make it into the ideal facilitator for child participation!
- For example, what will they have in their head, what size should their ears be, etc. (10 minutes)
- Discuss
- Experience shows it helps girls and boys to talk about their ideas if they are given practical activities to do and participate in



Tools for child participation (from C. O'Kane)

	Example 1	Example 2	Example 3
Identify	Risk mapping	Body mapping	Puppets
Prioritise	Matrix ranking	Dot voting	Diamond Ranking
Analyse	Why?why?why? causal analysis	Venn diagram (analyse which people most influence, access)	Tree analysis (root causes and impact)
Action Planning	Rocks and carts	How?how? how?	Visioning (ideal cf. actual, steps to reach)
Monitor	'H' assessment	Time-line (achievements and challenges)	Body Mapping (before and after)

 Save the Children

Tools for child participation – body map

Encourage the child to design the child highlighting good and bad things that they experience, see, hear about – record these issues inside or outside the body shape through images or words:

- e.g. when drawing the *head* ask children what they think about that makes them happy/sad/worried; as well as how adults think about children that makes them happy/sad
- the *eyes* ask children what do they see in their homes/ schools/ communities that makes them happy/ sad/ worried; as well as how adults see them which makes them happy/sad/worried;
- the *ears* what do they *hear* that makes them happy/sad/worried; as well as how adults listen to them;
- the *mouth*: what do they speak/ not dare speak about what they like/dislike/worry about; how do adults speak to them that makes them happy/sad;
- the *heart*: what do they feel that makes them happy/sad/worried; what do adults feel about children that makes them happy/sad;
- the *hands and arms* what do they touch/ play with that makes them happy/sad/ worried; how do adults use their hands and arms with children that makes them happy/sad/worried;
- the *stomachs* what do they eat / drink that makes them happy/sad/ worried;
- the *feet and legs* where do they go that makes them happy/sad/ worried;

Encourage girls and boys of all different age-groups to express their views. Enable discussion on the issues raised.

 Save the Children

Tools for child participation - diamond

- Enable children to develop a list of 9 priorities of issues that affect them.
- Draw or write each of the priorities on a piece of card (or post-it)
- Make the shape of the diamond ranking and ask the girls and boys to place the cards according to their highest and lowest priority of which issue they want to address. Ensure that all the children get to express their view and that all play a role in determining the final agreement of the placement of cards.
- Discuss the layout of the cards and the reasons for the priorities.



 Save the Children

Indicators for Child Participation

- Measure the scope or level of the participation (e.g. against the degrees of involvement)
- Measure the quality of the participation (e.g. against indicators based on the practice standards)
- Measure the impact of the participation – on children themselves, on parents, on staff, on institutions, on community, on the realisation of children's rights (from G. Lansdown – 'Measuring Child Participation')

 Save the Children

Examples of Child Participation 1

- 1) 'Mirrors of ourselves' - Child Clubs in Nepal

In groups.....

- Using the Degrees of involvement model, which degree of participation do you believe the case study to be?
- What type of questions would you ask to ensure that the project was meaningful and in the best interests of the child? You may like to use the practice standards and the set of criteria for each standard
- Finish the sentence.... "For meaningful and effective participation, it is important that"

 Save the Children

Examples of Child Participation 2

- 2) 'Young voices, big impressions' – Children's evaluation of an emergency response

In groups.....

- Using the Degrees of involvement model, which degree of participation do you believe the case study to be?
- What type of questions would you ask to ensure that the project was meaningful and in the best interests of the child? You may like to use the practice standards and the set of criteria for each standard
- Finish the sentence.... "For meaningful and effective participation, it is important that"

 Save the Children

Examples of Child Participation 3

3) 'Children know so many things even we didn't know' – children's views on their lives

In groups.....

- Using the Degrees of involvement model, which degree of participation do you believe the case study to be?
- What type of questions would you ask to ensure that the project was meaningful and in the best interests of the child? You may like to use the practice standards and the set of criteria for each standard
- Finish the sentence.... "For meaningful and effective participation, it is important that"



What can you do on child participation?

Take one colour sheet based on the following information:

- Red - I would find it difficult to incorporate child participation in my work
- Yellow – I need to think carefully about how the participation of children and young people would benefit the work that I do, but I think its possible
- Green – Participation of children can definitely help the work I do. I will need to discuss with my team or managers about how to progress.



What will you do on child participation?

- Discuss in pairs – give each other ideas on how participation may be made better.
- By yourself, write on your coloured sheet 3 things that you will do in order to improve child participation in your work
- Write one action you will take on Monday to progress your plans on child participation.



THANK YOU !! 

Participation ~~related~~ Rights Activity Sheet

Tick which articles of the United Nations Convention on the Rights of the Child (UNCRC) relate to the right to participate....



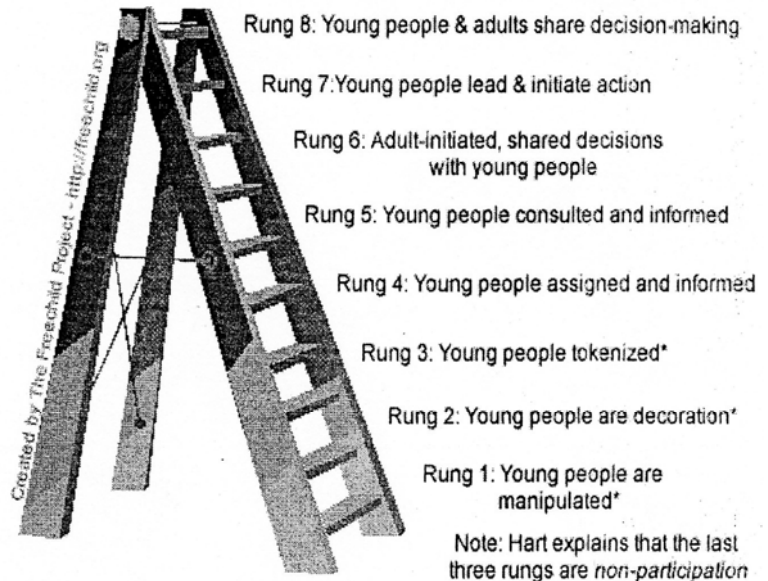
- ☐ **Article 12** – the child's opinion – the child has the right to express his or her opinion freely in all matters and procedures affecting the child. The child's views will be given due weight in accordance with the age and maturity of the child
- ☐ **Article 13** – freedom of expression. The child has the right to express his or her views in any media of the children's choice. Children also have freedom to seek, receive and impart information and ideas of all kinds
- ☐ **Article 14** – children have the right to freedom of thought, conscience and religion.
- ☐ **Article 15** – freedom of association. Children have the right to meet with others and join or form associations
- ☐ **Article 16** – respect for the right to privacy and confidentiality which enables children to express their views safely without fear of retribution
- ☐ **Article 17** – access to information. The state shall ensure that children have access to information and material from diverse sources and it shall encourage the mass media to disseminate information which enhances the child's social, physical, spiritual and moral well-being
- ☐ **Article 23** – special support for children with disabilities. A child with learning or physical disabilities should enjoy a full and decent life in conditions which ensure dignity, promote self reliance and facilitate the child's active participation in the community
- ☐ **Article 29** – education for responsible life. Education shall aim at developing the child personality, talents and mental and physical abilities to the fullest potential. Education shall prepare the child for responsible life in a free society, in the spirit of understanding, peace, tolerance, non-discrimination and friendship. Respect for the child's parents, his or her own cultural identity, language, values, environment will also be encouraged
- ☐ **Article 31** – right to play. The child had the right to rest and leisure, to engage in play and recreational activities appropriate to the age of the child and to participate freely in cultural life and the arts
- ☐ **Article 35** - all children should be protected from being sold, abducted and from trafficking.
- ☐ **Article 37** – all children should be protected from torture and cruelty and inhumane or degrading treatment

Models of Child Participation

Hart's Participation Ladder⁴

1. Hart's Ladder displays different sequential levels of non-participation and participation ranging from 'manipulation' at the bottom to 'child-initiated, shared decision-making with adults' at the top.
2. It suggests that the highest level of participation is best, but in practice the level workers aim for depends on where they and the young people are to begin with. It is up to the individual worker to judge what level is appropriate for that time and place.

Roger Hart's Ladder of Young People's Participation



Adapted from Hart, R. (1992). *Children's Participation from Tokenism to Citizenship*. Florence: UNICEF Innocenti Research Centre.

Rung 1: Manipulation

Young people are manipulated. Adults have complete control and often do not work in the best interests of the child. Adults might tell children what to say and have no opportunity to develop or have their own say on matters, and decision making power. Adults may pretend that they are the ideas of the young people.

Rung 2: Young people are decoration

Young people are used to look good or bolster a campaign or programme. Children on a float may be seen as a form of decoration.

Rung 3: Tokenism

Tokenism is when participation is not made meaningful for children. It may appear that a child is given a voice yet they may have little say on the topic or not much say in the way their views are communicated. A young person asked to speak for all children at an adult event can be seen as tokenistic.

⁴ *Children and Young People as Citizens: Partners in Social Change. Exploring Concepts. Part 1*. Save the Children. 2003.

Rung 4: Young People assigned and informed

Young people are assigned to a particular role such as a youth board. The role and topic for discussion is adult generated. The young person must be aware of the purpose of the activity, and volunteer freely after it is made clear to them. They should also know why it is important that they participate and what impact it might make to make it meaningful.

Rung 5: Young people consulted and informed

Young people are provided with information about what issues they are consulted on and their opinions are given consideration. Young people may be asked for their input on the design of programmes for example, i.e. how to best provide services to young victims of crime and street gangs. Adults still run the programmes however.

Rung 6: Adult initiated, shared decision making with young people

Adults initiate programmes or initiatives; however children are given decision making power as to how they may look, what is included and what outcomes might be achieved. This decision making is shared with adults. Participatory research projects may represent this stage where young people make decisions about the research approach, developing the methodologies, involved in analysing the data etc

Rung 7: Child initiated and directed

Children make decisions as to the direction and topic of their own activities, including deciding how to spend resources. An example may be activism led by young people about issues they have decided to work on. Adults may provide a supportive role only.

Rung 8: Child initiated, shared decisions with adults

At this rung, children initiate projects, and lead but with shared decision making powers. Adults and children might be decided collaboratively what the role of adults might be.

Meaningful Participation

The way children are involved or participate varies significantly. Tokenistic participation for example might not be considered 'meaningful' participation. The right conditions and opportunities need to exist.

Let's look at what meaningfully involving children might mean:

- Treating young people with respect, valuing their ideas and contribution
- Ensuring that participation is voluntary and on a level that the child is comfortable with.
- Thinking about then adults should take a leading role, a supportive role or allow children to take the lead.
- Providing an opportunity that suits the development needs of the child, i.e. at the right level for their stage of development and in line with their own wishes.
- Involving children in all stages and processes of the programme cycle from the inception to evaluation stages
- Using processes which encourage children who are marginalised or excluded to actively engage and be represented.
- Using interpreters, intermediaries and sign language interpreters if required - at all meetings
- Seek advice or work in partnership with specialist staff if you are unsure about how to support children who have differing needs (disability, alternative communication)
- Taking time and effort – prepare young people for meetings, explaining aims, what will happen, support young people to be involved as an equal stakeholder
- Factoring time into project planning – it takes time to do participation well!
- Ensure children are well informed and where necessary trained to participate – they want to feel informed and confident too!
- Building self-esteem and confidence of young people - providing opportunities, learning events, team building activities, congratulating and celebrating
- Considering ethics - Promote the best interests of the child and ensure that no other rights are violated
- Provide opportunities for children to inform the debrief and evaluation assessing their progress and how they would like to proceed, action planning

- Use child friendly (depending on age) methods where possible – make it fun, interesting and engaging
- Not expecting children to act like “mini” adults... ensure that (for example) the meeting set up and ambience is child friendly so that children feel comfortable to participate.
- Feeding back the outcomes of children’s involvement - reports and decisions
- Expecting children and young people to be passionate and serious about issues – don’t underestimate children
- Being open to learn from children – they have a unique perspective.
- Always asking, is there another way...

Glossary of participation words

- Consultation
- Meaningful – see handout ‘meaningful participation’
- Involvement
- Research
- Tokenism
- Advocacy
- Campaigning
- Citizenship
- Article 12 – from the United Nations Convention on the Rights of the Child
- Empowerment

Consultation

Consultation is one form of participation. In short it means to ‘ask’ a child’s opinion and this can differ in form, depending on the level of participation and to that affect, the level of decision – making. A consultation workshop on children’s experience of a service might be an isolated or on-going process, or involving children in an advisory board or panel might be another form of consultation. Consulting or asking children can occur at all levels – from the local level, right up to international level.⁶

Involvement

It is another word to describe participation. It can be used interchangeably and normally refers to involvement in decision making – just like Save the Children’s

⁶ *So you want to consult with children? A toolkit of good practice* (2003). Save the Children UK.

definition of participation. Involvement can be seen as degrees or levels of decision making. Please see Degrees of Involvement or the Participation ladder.

Research

Traditionally, children have been 'researched', rather than being involved in the planning, implementation, analysis and reporting stages of research. Ideally children should be seen as partners in research. As outlined in *Children and Participation: Research, monitoring and evaluation with children and young people*, involving children in research and evaluation leads to...

"Better knowledge of their views and priorities: Research is a way of finding out about the lives of young people, their priorities and perspectives, as well as finding out how policies and programmes affect them. Involving children and young people more centrally helps illuminate key issues and concerns. Thus it can lead to better information" (p.5)

Tokenism

Generally when children aren't meaningfully involved in decision-making, this might be considered tokenism. Harts ladder of participation, mentions that tokenism is when it may appear that a child is given a voice, in fact they may have little say in what is said, on what topic or how it might be communicated. A young person being asked to speak for all children at an adult event can be seen as tokenistic, especially if the child is not informed about the topic (see Participation Model handout).

Advocacy

Save the Children Alliance has defined advocacy as:

"a set of organised activities designed to influence the policies and actions of others to achieve positive changes for children's lives based on the experience and knowledge of working directly with children, their families and communities"⁷

Advocacy is a longer term plan or programme that aims to change policies and legislation. It is not a one off campaign. Children can participate as effective advocates and play key roles in planning and implementing advocacy strategies. Advocacy also plays a monitoring role to ensure that policies that will have positive benefits for children are implemented.

Save the Children defines two forms of advocacy: Child – centred advocacy and Child- led Advocacy

⁷ Advocacy Matters: Helping children change their world. An International Save the Children Alliance guide to advocacy. Participants Manual

- Child centred advocacy – children are involved in adult – led advocacy. Save the Children ensures that children’s interests are central and their voices are heard.
- Child – led advocacy – Children carry out advocacy on issues they select. Save the Children and adults provide support enabling children to advocate.

Campaigning

Campaigning involves children participating with others to claim children’s rights. There are many ways that children can voice their concern about a particular topic with the intention to create change. Campaigning with Save the Children might involve informing the state of children’s rights to the Prime Minister or signing up to a particular campaign on line. Campaigning highlights issues to the right people to influence change.

For example see the Campaigning for Change website at Save the Children
<http://www.savethechildren.org.uk/en/34.htm>

Citizenship

Save the Children’s definition of citizenship: ‘Citizenship implies that children develop values, skills and understanding which enable them to become responsible adults – but it is not just about becoming responsible adults. It recognises that children now have civil and political rights to participate and represent themselves in political, educational, social and economic processes and systems. It is also about their entitlement to be empowered to participate in society effectively as active, informal, critical and responsive adults’⁸

Citizenship means that children are seen as active citizens in their own and their families’ lives, but also in civil society (political, social, economic). In this way children are participating in civil society.

When adults are asked about what citizenship is, they said,

☛ *“Citizenship gives pupils the knowledge, skills and understanding to play an effective role in society at local, national and international levels.”*

When young people were asked as part of a youth led research residential, they said,
 ☛ *“To be a global citizen means to be aware of everyone’s rights and uphold them by taking informed, responsible action in the local and global community.”*

The United Nations Convention on the Rights of the Child (UNCRC) is the first human rights treaty to expressly acknowledge children to have civil rights.

⁸ *Participation: Spice it up*, (2002) Save the Children

Children campaigning for particular education rights for instance might be considered part of citizenship.

Article 12 – United Nations Convention on the Rights of the Child

Article 12 of the United Nations Convention on the Rights of the Child (UNCRC) says that 'the child has the right to express his or her opinion freely and to have that opinion taken into account in any matter or procedure affecting the child'. The UNCRC is a universal treaty that underpins the concept of participation. It means that it is a right of children that they are involved in decisions that affect them. There are other participation rights in the UNCRC, but this one is most often quoted as central to participation.

Empowerment

Children can be empowered as a result from involvement or participation in decision making processes - if managed and supported very well. Empowerment can be seen as being equipped with skills, confidence and ability and an ability to take ones life in their own hands. Some participation projects can disempower children, especially if adults do not provide meaningful and ethical participatory opportunities.

For further information...

<http://www.participationworks.org.uk> - Participation Works

<https://www.savethechildren.net/xtranet> - log in and follow links to the Practice Exchange Network for Child Participation (PEN-CHP)

Participation – Spice it Up! Practical tools for engaging children and young people in planning and consultations. Save the Children 2003

'DIY Toolkit: Improving your community – getting children and young people involved'

'Turning up the Sound: The feasibility of establishing a consortium to support the involvement of children and young people in decision-making processes'

'We Want Our Say: Children as active participants in their education'

第3回ワークショップ

「対立する両当事者の声を聴く」

<Tajikistan Case Study>

Food For Work for Rebuilding War-Damaged Homes in Tajikistan

Save the Children Federation

1. After the break-up of the Soviet Union, a struggle for leadership broke out in the former Soviet Republic of Tajikistan between communist factions and a coalition of anti-communist and Islamicist opposition groups. The result was an intense and bloody civil war that in early 1991 spread from the capital, Dushanbe, into rural areas and lasted until December of 1992. In the villages, the political content of the conflict was blurred so that it came to resemble an ethnic conflict between Kulyabi Tajiks, who supported the communist faction, and Garmsi Tajiks, who were associated with the opposition. Kulyabis and Garmsis are Tajik sub-groups that share the same religion, customs and language, a dialect of Farsi.
2. The worst of the fighting was concentrated in Khatlon Province, located in southwestern Tajikistan and bordering on Afghanistan. The area had been settled during the 1930's and 1940's when the Soviet government had forcibly relocated tens of thousands of Garmsis and Kulyabis to the area to become workers in the newly created cotton-growing state farms. Typically, entire villages were relocated and, as a result, the region became a patchwork of mono-ethnic villages. However, over the years some villages merged and, by the outbreak of the civil war, about a quarter of the villages in the region were ethnically mixed. In the cities and towns, there was a high degree of inter-group marriage. Demonstrations of strong ethnic identification were rare in the daily lives of the people.
3. During the war, villages became targets of looting and burning by both sides. In late 1992, with the help of Russian troops still stationed in the area, the Kulyabi forces defeated the Garmsi. Though damage had been moderate during the war, the victory was followed by a rampage of the Kulyabi militias during which Garmsi houses and villages were systematically destroyed. Many men were killed, over 20,000 homes were severely damaged or destroyed, and many families fled for safety. In many Garmsi villages, only the mosque was left standing.
4. Though open warfare ended in late 1992, the armed opposition remains active in northern Afghanistan and continues to stage cross-border raids from time to time. In addition, they control some mountainous sections of Tajikistan. Twenty-five thousand Russian troops remain in the country, helping keep open warfare from breaking out again. Even so, an atmosphere of relative lawlessness continues as bands of armed thugs (sometimes inter-ethnic in their composition) continue to loot villages and steal humanitarian relief supplies.

5. By fall 1994, Save the Children Federation (SCF) had a large and active programme underway in several districts of Khatlon Province. The programme provided food payments from Food for Work (FFW) to village-based brigades of local people in payment for their labor on the reconstruction of war-damaged homes. The project was successful in supporting the rebuilding of many homes and this, in turn, encouraged the rapid repatriation of people who had fled during the war. SCF staff felt that repatriation was an important first step in reconciliation, but they also wanted to find other opportunities to use their programme to promote inter-group linkages and reconciliation.
6. Tajikistan was the poorest of the Soviet Republics. By decision of central Soviet authority, the economy was concentrated in cotton production and related enterprises (such as cotton milling, cotton seed production and garment making). The single-sector specialization meant that Tajikistan, like other Soviet Republics, depended heavily on trade for most goods. Most basic foodstuffs have been imported since the 1930's.
7. Cotton production fell throughout the 1980s. The war greatly worsened an already bad economic situation. Destruction of factories, equipment and the extensive network of irrigation canals essential for cotton production, coupled with an out-migration of many non-Tajik skilled technicians and managers, left the country's economy severely disrupted. The breakdown in trade left Tajikistan facing serious food shortages.
8. The cotton farming in Khatlon was organized in large state farms that held most of the province's best arable land and employed the majority of the working population. Each state farm included many villages without regard for their ethnic composition. Thus, Kulyabi and Garmi had worked side-by-side, men in positions of management and on canal maintenance and women in planting, cultivation and harvesting. Villages also shared schools, clinics and all the other social services of the Soviet system. In spite of occasional tensions and competition for leadership positions within the state farms, relations between groups were generally harmonious. As the war came to an end, the fields lay fallow awaiting the planting of a cotton crop on which virtually everyone in Khatlon Province depended for survival. The vast network of irrigation canals was disrupted, undermining any potential cotton crop and water access in villages as well.
9. Each household in Khatlon continues to own a small private plot on which they have always grown vegetables for household consumption and local sale.
10. In some cases, local people of Khatlon took "reconciliation initiatives" in the period of repatriation. For example, a woman officer of one district government knew her former Garmi neighbors were returning. She "prepared food for three days" and invited these returnees and her Kulyabi neighbors to dinner beneath her garden arbor. Facing each other across her table, they ate together in what she hoped was a reconciling way. In another village, when Garmi families returned, Kulyabi residents "went out to meet them with bread and salt," a traditional

symbolic welcoming. Many people believed that "the common people don't want war, but policy people make it."

11. Many noted that women have a special role to play in overcoming animosity. As one woman said, "The nature of women is different. She can forget and forgive but man is a little bit animal. His blood is hot." Others outlined things women could do including: "training their children better not to hate" (Kulyabi woman); "teaching my children and grandchildren not to seek reprisals, not to keep remembering and not to 'play' war with 'them'" (Garmi woman); "working together on common projects with 'them'" (Kulyabi woman); "getting my husband who was a school teacher to meet with 'their' teachers to talk about how teachers from both groups can teach better attitudes in school" (Garmi woman); and "women must lead us" (Kulyabi man).
12. In some villages, elder women and men formed committees to help settle disputes over housing when a Garmi family would return to find that a Kulyabi family had moved into their former home. However, many people also put responsibility for peace-making somewhere else. They shrugged and said: "time is the best healer" or "it will never happen again because people don't want war" or "we have learned our lesson" or "they have learned their lesson."
13. At the beginning of the repatriation process, Save the Children Federation (SCF) identified two main problems in post-war Tajikistan--a shortage of food and a large number of damaged or destroyed homes. Although food security was less than optimal in Kulyabi villages, malnutrition was mainly found in the destroyed villages.
14. SCF's response was to set up village-based brigades whom they paid with Food for Work to rebuild and repair houses. Priority was given to those villages with the most extensive damage and all destroyed houses in a targeted village were eligible for reconstruction. All village residents--both men and women--who wished to work were eligible to join a brigade. SCF surveyed housing to set priorities for repair and entered into "contracts" with brigades to do the work. The brigades built houses in the traditional way using local mud to make bricks for walls, and SCF provided roofing materials (donated by UNHCR which supplied these as part of their mandated programme to repatriate refugees). Food earned by one person working in a brigade was sufficient to meet 80% of an average family's caloric requirements through the winter of 1994-95.
15. By the fall of 1994, the FFW programme was well established in several districts of Khatlon Province. With over 80 locally hired staff, the programme had been able to organize 15,000 people, mostly returning refugees, to build 12,000 houses. To ensure that they did not hire staff with ethnic prejudices, SCF instituted an interviewing arrangement whereby staff of several different ethnicities interviewed each prospective candidate. It was assumed that any ethnic slurs or biases would be noted by at least one of the interviewers. SCF was satisfied that they were enabling the faster and safer repatriation of refugees and IDPs to the area and that this was a prerequisite for reconciliation.

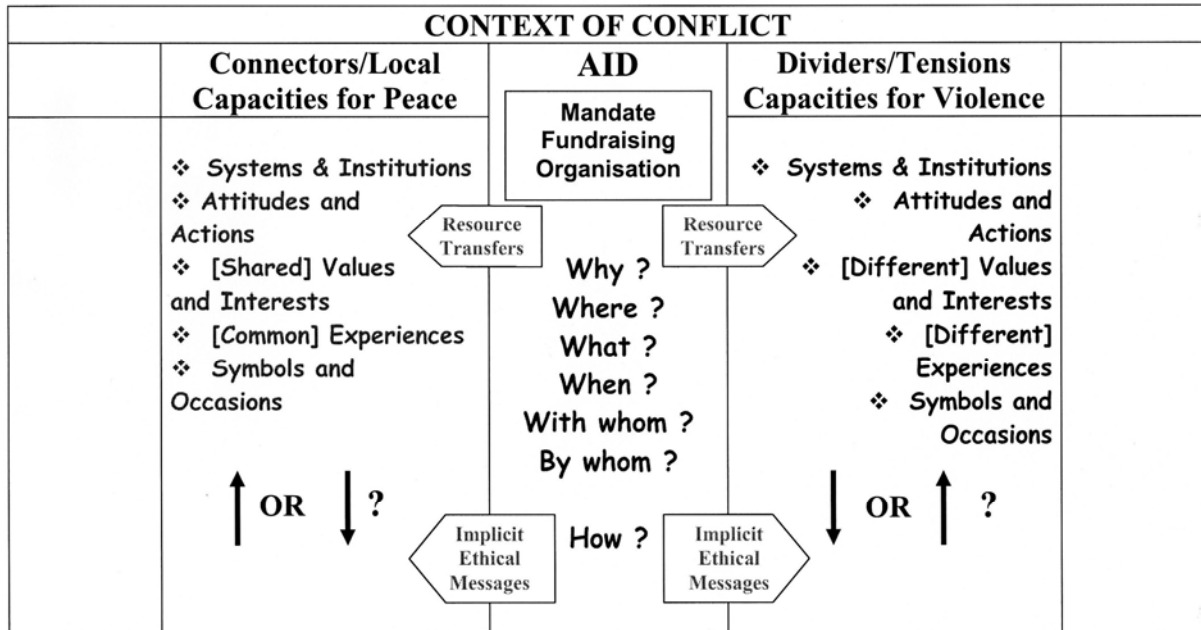
<Framework For Considering The Impact Of Aid On Conflict>

Framework For Considering The Impact Of Aid On Conflict

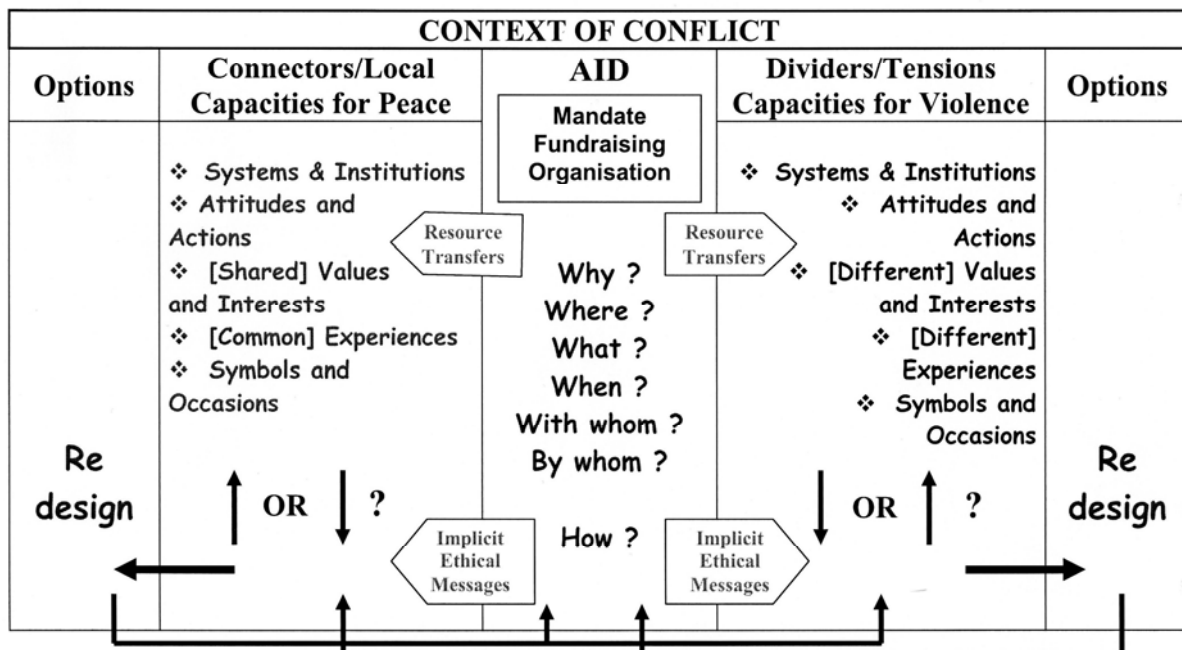
CONTEXT OF CONFLICT				
	Connectors/Local Capacities for Peace	AID	Dividers/Tensions Capacities for Violence	
	<ul style="list-style-type: none"> ❖ Systems & Institutions ❖ Attitudes and Actions ❖ [Shared] Values and Interests ❖ [Common] Experiences ❖ Symbols and Occasions <p>↑ OR ↓ ?</p>		<ul style="list-style-type: none"> ❖ Systems & Institutions ❖ Attitudes and Actions ❖ [Different] Values and Interests ❖ [Different] Experiences ❖ Symbols and Occasions <p>↓ OR ↑ ?</p>	

		Mandate Fundraising Organisation		
		<p>Why ? Where ? What ? When ? With whom ? By whom ?</p> <p>How ?</p>		

Framework For Considering The Impact Of Aid On Conflict



Framework For Considering The Impact Of Aid On Conflict



**Step by Step Method
Local Capacities for Peace (LCP)
Do No Harm Analysis**

1. What are the **sources of tensions** (dividers) or conflicts that exist between different groups?
 - in the past, current or potential in future?
 - local, regional, national?
2. What **connectors** (things that bring people together) or capacities for peace exist between the above groups?
 - systems, institutions
 - attitudes, actions
 - values, interests
 - experiences
 - occasions, symbols
3. **Describe the program** *in detail* (current, future). Use the following questions to guide you:
 - Why?
 - What?
 - How?
 - With whom?
 - By whom?
 - When?
4. For each action that you plan to undertake (described above), you must check:
 - In what ways does the program **increase or decrease tensions**?
 - In what ways can the program **support or weaken the connectors**?
5. For each impact (positive or negative) identified as a side effect of the planned program:
 - **Develop program options** that might decrease negative effects and increase positive ones
 - **Check the options** developed for their impact on other connectors and dividers
6. Check the questions. Repeat the process as required.

<DIVIDER THEMES AND QUESTIONS>

DIVIDER THEMES AND QUESTIONS

1. What are the differences between the group that cause friction?
 - Ethnicity?
 - Differing lifestyles/occupations?
 - Religion?
 - Political affiliation?
 - Different class/status groups?
2. How do different groups perceive each other?
3. What actions are individuals or groups taking which lead to tension or violence? Inside the community? From outside the community?
4. What attitudes exist which worsen relations between the groups or lead to violence?
 - Hatred
 - Fear, mistrust
 - Racism
 - Intolerance
5. How do the perceived interests of the groups differ?
6. What do the groups compete over?
 - Resources?
 - Economic Benefits?
 - Political Power?
7. What institutions exist which are promoting the conflict or increasing the likelihood of violence? What are the structures or institutions that exist that threaten lives or livelihoods? Inside the community? Outside the community?
 - Discrimination in e.g. education, employment, healthcare
 - Globalization of economies
 - Denial of rights and liberties
 - Segregation e.g. apartheid or other institutional racism/discrimination
8. Who stands to gain from continued tension?
9. Other sources of tension?

<Definitions of “conflict” and “aid”>

Definitions:

In the LCP manual – and, hence, in the workshop –, the word “**conflict**” refers to negative, destructive, often violent, group interactions. It does not refer to the variety of intergroup disagreements and other forms of constructive struggle by which social change occurs.

Also, in the LCP manual and in the context of LCP workshops “**Aid**” is a shorthand to refer to the various forms of humanitarian or development assistance provided by international and local non-governmental as well as governmental and international organizations. The use of the term “aid” has led to various misunderstandings. For example, many people assumed that the use of the term “aid” signals that the empirical evidence of the LCP project came only from the context of humanitarian or emergency aid – and therefore the tool was relevant only for programming humanitarian emergency interventions. In fact, experience of agencies working in development cooperation has contributed to the learning process throughout the entire project. Development organizations have been part of process all the time.

< LCP Workbook >

Identifying

Dividers/ Sources of Tensions/ Capacities for War and Connectors/ Local Capacities for Peace

	Dividers/Sources of Tension/Capacities for War	Connectors/Local Capacities for Peace
Systems & Institutions		
Attitudes & Actions		
(Different/Shared) Values & Interests		
(Different/Common) Experiences		
Symbols & Occasions		

Unpacking Your Aid Program

	Impact on Dividers (identified on page 1)	Impact on Connectors (identified on page 1)
Mandate		
Fund raising		
HO Organization		
Why?		
Where?		
What?		
When?		
By Whom?		
With whom?		
How?		

Understanding Aid's Impact on Conflict Through Resource Transfers

There are five different mechanisms by which resource transfers (RT) affect aid's impact on conflict. Analyse (unpack) your aid program and identify its impacts on Dividers and Connectors along each of the five RT mechanisms. For example, how do the resources or services you deliver affect markets? What prices fall? How does this impact the dividers and connectors?

Resource Transfers <i>Question: How does aid's transfer of resources impact on dividers or connectors via these mechanisms?</i>	Impact on Dividers (identified on page 1)	Impact on Connectors (identified on page 1)
Theft		
Markets		
Distribution		
Substitution		
Legitimization		

Understanding Aid's Impact on Conflict Through Implicit Ethical Messages

There are seven types of Implicit Ethical Messages (IEMs) involved in the giving of aid. Analyse (unpackage) your aid program and identify the IEMs and their impact on Dividers and Connectors.

Implicit Ethical Message <i>Question: Where and how does each implicit ethical message show up, and how does it impact on dividers and connectors?</i>	Impact on Dividers (identified on page 1)	Impact on Connectors (identified on page 1)
Arms and Power		
Disrespect, Mistrust, Competition		
Impunity		
Different Values for Different Lives		
Powerlessness		
Belligerence, Tension, Suspicion		
Publicity/Funding		

Generating And Testing Programming Options I: Dividers

Reminder - If an aid program increases Dividers or feeds into sources of tension:

- List all possible options for reducing that Divider while still maintaining the goal of the aid program
- Then assess the likely impact of each option on the Connectors

Question: How can you (re) design the aid program in such a way as to reduce the Dividers?

Dividers	Programming Options	Likely Impact on Connectors
Here, list those Dividers which you have identified as those with which your project may be interacting	<p>Identify alternative ways of doing what you intend to do but avoiding negative impacts</p> <p>#1.</p> <p>#2.</p> <p>#3.</p> <p>#....</p>	Assess (test) the likely impact of an option generated on Connectors

Generating And Testing Programming Options II: Connectors

Reminder- If an aid program weakens Connectors or local capacities for peace:

- List all possible options for strengthening that Connector while still maintaining the goal of the aid program
- Then assess the likely impact of each option on the Dividers

Question: How can you (re) design the aid program in such a way as to strengthen the Connectors?

Connectors	Programming Options	Likely Impact on Dividers
Here, list those connectors/LCPs which you have identified as those with which your project may be interacting	Identify alternative ways of doing what you intend to do but avoiding negative impacts #1. #2. #3. #....	Assess (test) the likely impact of an option generated on Dividers

Local Capacities for Peace Project – Workbook

Collaborative for Development Action June 2001

Adapted by M. Garred WVI May 2003

<Local Capacity for Peace>

What Are Local Capacities for Peace?

Every society has both individuals and many other factors that prevent every disagreement from breaking out into war and that help contain and move away from violence if it begins. These include justice and legal systems, police forces, implicit codes of conduct, elders groups, church or civic leaders, etc. The roles of conflict prevention and mediation are assigned to some people and institutions in every society. These are what we mean by capacities for peace.

- ☑ The trainer should caution the group against “easy” identification of connectors or peace capacities. For example, many people assume that “women’s groups” are connectors or peace capacities. But experience shows that women’s groups can either be connectors or deeply committed dividers. Similarly, churches can serve to connect groups or they can serve to divide. One must always look, in context, for who is being connected and who is being divided and how this is occurring in order to do this analysis accurately. If people within one group are being effectively „connected“ in order to oppose other groups with greater strength, it would be a mistake to identify this connection as one that is promoting intergroup harmony.

What Do We Mean By Connectors or Local Capacities for Peace?

In the midst of warfare, especially in situations of civil war where former fellow-citizens are fighting each other, there continue to exist a whole series of things that connect - or can connect - people who are fighting. These include:

Systems and Institutions

For example, in all societies where civil war breaks out, markets continue to connect people across the lines of fighting. Sometimes these involve formal inter-enemy trade; sometimes they involve women meeting at the market by the river-side one morning a week. Communications systems can provide linkages (for example, we have been told by many people that they value the BBC because they know that everyone on all sides of a war can hear the same

information about what is happening); in some cases, irrigation systems, bridges, roads and electrical grids connect people in spite of war (in some cases, they are destroyed by warriors intent on separating people).

Attitudes and Actions

For example in the midst of war, one finds individuals and groups who continue to express attitudes of tolerance, acceptance, even love or appreciation for people on the “other side.” One finds people who act in non-war ways, doing things that the war would dictate were wrong such as adopting abandoned children of the “other side,” linking across lines to continue a professional association or journal, setting up new associations of people opposed to the war. They do these things because they seem “normal” or “right.” Often, they do not think of them as extraordinary or, even, as non-war.

Shared Values and Interests

For example, the common value placed on children’s health has been the basis for UNICEF’s success in negotiating days of tranquility for inoculations against childhood diseases. Sometimes a common religion can bring people together.

Common Experiences

For example, war itself can provide linkages among different sides. Citing the experience of war and suffering as “common to all sides,” people sometimes create new anti-war alliances across boundaries.

Symbols and Occasions

For example, stories abound of the soldiers in the trenches in WWII who, on Christmas eve began to sing “Silent Night” together, and then, they returned to war. National art, music, historical anniversaries, national holidays, monuments can bring people together or link them across differences.

These five categories are illustrated in many of the vignettes in Appendix II.

The categories are not meant to be conceptually tight and mutually exclusive; rather, they are meant to open up our minds so that we actually see how many things do continue to connect people even in warfare. To be able to recognize these and support them offers options for aid programmers in conflict settings.

第 4 回ワークショップ

「受益者のアカウンタビリティ確保について」

<タイムスケジュール>

Time	Topic	Issues Covered
10:00 – 12:00	Welcome & Introductions	<ul style="list-style-type: none"> Session introductions Participant introductions
	What is Accountability and Why Does it Matter?	<ul style="list-style-type: none"> Definitions and overview Case study
	Foundation of Accountability	<ul style="list-style-type: none"> Case study on principles of accountability Overview of International standards, specifically the Red Cross Code of Conduct
12:00 – 12:15	Tea Break	
12:15 – 12:45	Components of Accountability	Overview of: <ul style="list-style-type: none"> Humanitarian Accountability Partnership (HAP) Benchmarks Good Enough Guide Basic Elements of Accountability
12:45 – 1:30	Lunch	
1:30 – 2:35	Components of Accountability (continued)	Overview of: <ul style="list-style-type: none"> Humanitarian Accountability Partnership (HAP) Benchmarks Good Enough Guide Basic Elements of Accountability
2:35 – 2:45	Tea Break	
2:45 – 4:00	Implementing Accountability	<ul style="list-style-type: none"> Review of accountability in World Vision Myanmar Cyclone Nargis Response Translating the accountability model into practice
	How Can You Support Accountability?	<ul style="list-style-type: none"> Individual exercise to identify immediate and long-term steps you and your organization can take to support accountability
	Evaluation	

Scenario – The Bus Service

Courtesy of HAP International

Around 75 passengers including children and elderly people are waiting at a bus stand. They are waiting to take the bus to Tentaka, which is 8 hours away. The bus to Tentaka only comes once every week.

The bus arrives 3 hours late, forcing the passengers to wait in the sun. When it arrives the passengers surge on to the bus and their luggage is loaded on top and inside the bus. As the bus has seating capacity for 40 it is very over-crowded. A woman with 4 young children talks quietly to the bus conductor to see what she can do to get a seat.


But the bus does not depart. The bus conductor tells the passengers that it will leave within 10 minutes, but the bus remains at the bus stand for another 2 hours, while more cargo is loaded on the bus. Eventually the bus starts its journey, but some passengers begin to suffocate in the overcrowded hot bus, and everyone begins to panic.

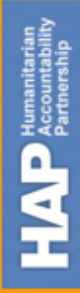
One of the passengers, an old man shouts at the bus conductor and threatens to hit him. The bus conductor shouts back at him and stops the bus.

Questions for discussion:


1. What do you think happened next?
2. Why do you think this situation occurred?
3. What are the parallels with the humanitarian world (and NGOs)?

KEY INTERNATIONAL STANDARDS AND TOOLS


STANDARD (incl PRINCIPLES)	PURPOSE	APPLICATION TO ACCOUNTABILITY	FIELD
 <p>The Code of Conduct: Principles of Conduct for the International Red Cross and Red Crescent Movement and NGOs in Disaster Response www.ifrc.org/publicat/conduct/index.asp</p>			
<ol style="list-style-type: none"> 1. The humanitarian imperative comes first 2. Aid is given regardless of the race, creed or nationality of the recipients and without adverse distinction of any kind. Aid priorities are calculated on the basis of need alone 3. Aid will not be used to further a particular political or religious standpoint 4. We shall endeavour not to act as instruments of government foreign policy 5. We shall respect culture and custom 6. We shall attempt to build disaster response on local capacities 7. Ways shall be found to involve programme beneficiaries in the management of relief aid 8. Relief aid must strive to reduce future vulnerabilities to disaster as well as meeting basic needs 9. We hold ourselves accountable to both those we seek to assist and those from whom we accept resources 10. In our information, publicity and advertising activities, we shall recognize disaster victims as dignified humans, not hopeless objects 	<p>A list of ten principles which all NGOs should adhere to in their disaster response work. These principles should guide the behavior of humanitarian workers on a day-to-day basis both at the field level in how we work with communities, government and other stakeholders and at a headquarters level in our relationships with donors and the public.</p> <p>World Vision International has signed on to these principles, agreeing to abide by them.</p> <p>A detailed description of each principle can be viewed at the IFRC website www.ifrc.org/publicat/conduct/index.asp</p>	<p>The Code of Conduct outlines important foundational principles which are critical to accountability by reinforcing beneficiary participation, impartiality, transparency, respect and accountability.</p> <p>Specifically, the Code of Conduct calls for:</p> <ul style="list-style-type: none"> • Beneficiary participation • Thorough assessment to ensure assistance is appropriate, needed and sustainable • Understanding and use of local capacities and resources, including community knowledge, structures, processes and people 	

STANDARD (incl PRINCIPLES)	PURPOSE	APPLICATION TO FIELD IMPLEMENTATION
<div>  <p>The Humanitarian Accountability Partnership (HAP): 2007 Standard in Humanitarian Accountability and Quality Management www.hapinternational.org</p> </div>		
<p>Principles</p> <ol style="list-style-type: none"> Commitment to humanitarian standards and rights <ul style="list-style-type: none"> Members state their commitment to respect and foster humanitarian standards and the rights of beneficiaries Setting standards and building capacity <ul style="list-style-type: none"> Members set a framework of accountability to stakeholders Members set and periodically review their standards and performance indicators, and revise them if necessary Members provide appropriate training in the use and implementation of standards Communication <ul style="list-style-type: none"> Members inform, and consult with, stakeholders, particularly beneficiaries and staff, about the standards adopted, programmes to be undertaken and mechanisms available for addressing concerns Participation in programmes <ul style="list-style-type: none"> Members involve beneficiaries in the planning implementation, monitoring and evaluation of programmes and report to them on progress, subject to operational constraints Monitoring and reporting on compliance <ul style="list-style-type: none"> Members involve beneficiaries and staff when they monitor and revise standards Members regularly monitor and evaluate compliance with standards, using robust processes Members report at least annually to stakeholders, including beneficiaries, on compliance with standards. Reporting may take a variety of forms Addressing complaints <ul style="list-style-type: none"> Members enable beneficiaries and staff to report complaints and seek 	<p><i>its principles and benchmarks were developed by a partnership of humanitarian agencies, including World Vision International to establish best practice for accountability.</i></p> <p><i>The benchmarks were created as indicators that an agency was meeting the HAP accountability principles. The benchmarks are auditable indicators, when met, that indicate accountable practices according to the HAP Standard.</i></p> <p><i>The Guide to the HAP Standard provides practical guidance and tools on how to implement the benchmarks.</i></p> <p>World Vision International is a member of HAP and has signed onto the Standard, agreeing to abide by it.</p>	<p>The key international standard dedicated to humanitarian accountability.</p> <p>The standard incorporates aspects of other standards, such as the Red Cross Code of Conduct and Sphere, especially in its principles.</p> <p>Specifically, the Standard calls for:</p> <ul style="list-style-type: none"> Beneficiary participation Informing beneficiaries about our agency, our commitments and all aspects of our projects Consultation with beneficiaries to achieve informed consent where they understand what they are consenting to Thorough assessment to ensure assistance is appropriate, needed and sustainable A Humanitarian Accountability Framework and Quality Management System both designed to provide a list of our commitments as an agency and a plan to ensure that we meet those commitments (such as adherence to the HAP Standard or the Code of Conduct) A beneficiary complaints

<p>redress safely</p> <p>7. Implementing partners</p> <ul style="list-style-type: none"> Members are committed to the implementation of these principles if and when working through implementation partners <p>Benchmarks</p> <p>Benchmark One: The agency shall establish a humanitarian quality management system.</p> <p>Benchmark Two: The agency shall make the following information publicly available to intended beneficiaries, disaster-affected communities, agency staff and other specified groups: (a) organisational background; (b) humanitarian accountability framework; (c) humanitarian plan and financial summary; (d) progress reports; and (e) complaints handling procedures</p> <p>Benchmark Three: The agency shall enable beneficiaries and their representatives to participate in programme decisions and seek their informed consent</p> <p>Benchmark Four: The Agency shall determine the competencies, attitudes and development required for staff to implement its humanitarian quality management system.</p> <p>Benchmark Five: The agency shall establish and implement complaints handling procedures that are effective, accessible and safe for intended beneficiaries, disaster affected communities, agency staff, humanitarian partners and other specified bodies.</p> <p>Benchmark Six: The agency shall establish a process of continual improvement for its humanitarian accountability framework and humanitarian quality management system.</p>	<p>mechanism reinforcing that beneficiaries have rights and we should respond to their complaints about our project or actions.</p> <ul style="list-style-type: none"> Continuous program improvement as a result of beneficiary feedback
---	--

STANDARD (incl PRINCIPLES)	PURPOSE	APPLICATION TO IMPLEMENTATION	FIELD
 <p>The Sphere Project</p> <p>The Sphere Project: Humanitarian Charter and Minimum Standards in Disaster Response (selected sections) www.sphereproject.org</p>	<p>The Humanitarian Charter</p> <p>Humanitarian agencies committed to this Charter and to the Minimum Standards will aim to achieve defined levels of service for people affected by calamity or armed conflict, and to promote the observance of fundamental humanitarian principles.</p> <ol style="list-style-type: none"> Principles <ul style="list-style-type: none"> The right to life with dignity The distinction between combatants and non-combatants The principle of non-refoulement Roles and Responsibilities <ul style="list-style-type: none"> We recognize that it is firstly through their own efforts that the basic needs of people affected by calamity or armed conflict are met. Those affected are entitled to protection and assistance. Humanitarian agencies' role in providing humanitarian assistance reflects the reality that those with primary responsibility are not always able or willing to perform this role themselves. The frequent failure of warring parties to respect the humanitarian purpose of interventions has shown that the attempt to provide assistance in situations of conflict may potentially render civilians more vulnerable to attack, or may on occasion bring unintended advantage to one or more of the warring parties. We recognize and support the protection and assistance mandates of the International Committee of the Red Cross and the United Nations High Commissioner for Refugees under 	<p>The Sphere Project: has two main elements:</p> <ol style="list-style-type: none"> Behavioral standards included in the Humanitarian Charter and the Minimum Standards Common to all Sectors Technical minimum standards for assistance activities <p>As with the Red Cross/Crescent Code of Conduct, all NGOs should adhere to the Humanitarian Charter and Common Standards in their disaster response work, regardless of the technical sector. These principles should guide the behavior of humanitarian workers on a day-to-day basis.</p> <p>World Vision International has signed on to the Humanitarian Charter and Minimum Standards, agreeing to abide by them.</p>	<p>The Humanitarian Charter and Common Standard I on participation relate to aspects of accountability that should be evident in all projects, regardless of their technical focus</p> <p>Specifically, the Humanitarian Charter and Common Standard I calls for:</p> <ul style="list-style-type: none"> Beneficiary participation Thorough assessment to ensure assistance is appropriate, needed and sustainable Understanding and use of local capacities and resources, including community knowledge, structures, processes and people

<p>humanitarian law.</p> <p>3. Minimum Standards</p> <ul style="list-style-type: none"> • The Minimum Standards are based on agencies' experience of providing humanitarian assistance. We commit ourselves to attempt consistently to achieve them and we expect to be held account accordingly. We invite other humanitarian actors, including states themselves, to adopt these standards as accepted norms. • By adhering to the standards, we commit ourselves to make every effort to ensure that people affected by disasters have access to at least the minimum requirements to satisfy their basic right to life with dignity. • We expect to be held accountable to this commitment and undertake to develop systems for accountability within our respective agencies, consortia and federations. We acknowledge that our fundamental accountability must be to those we seek to assist. 		
<p>Minimum Standards Common to all Sectors</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Participation 2. Initial Assessment 3. Response 4. Targeting 5. Monitoring 6. Evaluation 7. Aid worker competencies and responsibilities 8. Supervision, management and support of personnel <p>Minimum Sector Standards</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Water Supply, Sanitation and Hygiene Promotion 2. Food Security, Nutrition and Food Aid 3. Shelter, Settlements and Non-Food Items 4. Health Services <p>REFER TO SPHERE HANDBOOK FOR DETAILED MINIMUM STANDARDS</p>		

STANDARD (incl PRINCIPLES)	PURPOSE	APPLICATION TO FIELD IMPLEMENTATION
<div></div> <p>The Emergency Capacity Building Project: The Good Enough Guide www.ecbproject.org</p>	<p>PURPOSE</p>	<p>APPLICATION TO FIELD IMPLEMENTATION</p>
<p>Basic Elements of Accountability At a minimum, humanitarian project staff should:</p> <ol style="list-style-type: none">1. Provide public information to beneficiaries and other stakeholders on their organisation, its plans, and relief assistance entitlements.2. Conduct ongoing consultation with those assisted. This should occur as soon as possible at the beginning of a humanitarian relief operation, and continue regularly throughout it. 'Consultation' means exchange of information and views between the agency and the beneficiaries of its work. The exchange will be about:<ul style="list-style-type: none">• The needs and aspirations of beneficiaries• The project plans of the agency• The entitlement of beneficiaries• Feedback and reactions from beneficiaries to the agency on its plans and expected results3. Establish systematic feedback mechanisms that enable:<ul style="list-style-type: none">• Agencies to report to beneficiaries on project progress and evolution• Beneficiaries to explain to agencies whether projects are meeting their needs• Beneficiaries to explain to agencies the difference the project has made to their lives4. Respond, adapt, and evolve in response to feedback received, and explain to all stakeholders the changes made and/or why change was not possible.	<p>The Guide is not a standard such as the Red Cross/Crescent Code of Conduct, HAP Standard or Sphere Charter and Minimum Standards. Rather, it is a set of basic guidelines and tools to be accountable to communities and help guide the behavior of humanitarian workers.</p> <p>"Good enough" means that it promotes simple and practical solutions. The tools within the Good Enough Guide have also been incorporated into the Guide to the HAP Standard and they can be used together with the Standard.</p> <p>World Vision International is one of the seven humanitarian agencies that developed the Guide and has committed to promoting use of the Guide in its programs.</p>	<p>The Good Enough Guide is a key tool in the application of accountability in the field. It incorporates the HAP Standard as well as other accountability initiatives.</p> <p>Specifically, the Guide provides guidelines, tools and resources to support:</p> <ul style="list-style-type: none">• Beneficiary participation• Informing beneficiaries about our agency, our commitments and all aspects of our projects• Consultation with beneficiaries to achieve informed consent where they understand what they are consenting to• Thorough assessment to ensure assistance is appropriate, needed and sustainable• A beneficiary complaints mechanism reinforcing that beneficiaries have rights and we should respond to their complaints about our project or actions.• Continuous program improvement as a result of beneficiary feedback

Tool 1:

How to introduce your agency: a need-to-know checklist

This checklist can be used to help make sure field staff know the answers to questions they are likely to be asked by beneficiaries, government officials, and others. You can use it at the start of a project or in conjunction with Tool 11 to brief new staff.

Who are we?

1. What is an NGO?
2. What is our mandate?
3. Why is our agency here?
4. Where do we get the money?

Our aim

5. What can we do for people affected by the emergency in relation to:
 - a) Water and sanitation
 - b) Shelter
 - c) Livelihoods
 - d) Public health promotion
 - e) Other kinds of project
6. Why do we do this rather than other things?

The project and the community

7. What is our project area?
8. Who decided?
9. Who was involved in deciding project activities?
10. What is the plan for the whole project?
11. How long will it last?
12. Who are the beneficiaries?
13. Why were some people chosen and not others?
14. Who was involved in deciding who the beneficiaries should be?

15. How does the project work? How are beneficiaries involved?
16. What will beneficiaries contribute?
17. What will we contribute?
18. What do the materials cost us?
19. What is the progress this month? What is the plan for next month?
20. What are the main challenges for technical staff this month?
21. What are technical staff doing to address these challenges?
22. What exactly will beneficiaries receive?
23. When will they receive it?

Dealing with problems or complaints (see also Tool 13)

24. If something goes wrong with the project what can people do?
25. If there is a problem with a community leader or community member working with us, what can people do?
26. If there is a problem with one of our staff (corruption, fraud, bad behaviour), what can people do?

Other organisations and the government

27. Which other NGOs are working in the project location?
28. What do they do?
29. What government assistance is available? How do people access it?
30. What other problems are people having? (For example, being displaced, no access to land, not being able to meet government officials to resolve problems.)

From T. Gorgonio and A. Miller (2005) 'Need To Know List', Oxfam GB (internal, adapted).

Tool 3:

How to involve people throughout the project

This tool suggests ways of informing, consulting, involving, and reporting to people affected by an emergency at every stage of the project. It was originally developed for use in villages in Aceh. It can be adapted for other sites too.

Before assessment

- Determine and clearly state the objectives of the assessment
- If you can, inform the local community and local authorities well before the assessment takes place
- Include both women and men in the project team
- Make a list of vulnerable groups to be identified during the assessment
- Check what other NGOs have done in that community and get a copy of their reports

During assessment

- Introduce team members and their roles
- Explain the timeframe for assessment
- Invite representatives of local people to participate
- Create space for individuals or groups to speak openly
- Hold separate discussions and interviews with different groups, for example: local officials, community groups, men, women, local staff
- Ask these groups for their opinions on needs and priorities. Inform them about any decisions taken.

Note: If it is not possible to consult all groups within the community at one time, state clearly which groups have been omitted on this occasion and return to meet them as soon as possible. Write up your findings and describe your methodology and its limitations. Use the analysis for future decision-making.

During project design

- Give local authorities and community, including the village committee and representatives of affected groups, the findings of the assessment

- Invite representatives of local people to participate in project design
- Explain to people their rights as disaster-affected people
- Enable the village committee to take part in project budgeting
- Check the project design with different groups of beneficiaries
- Design a complaints and response mechanism

During project implementation

- Invite local community, village committee, and local authorities to take part in developing criteria for selection of beneficiaries
- Announce the criteria and display them in a public place
- Invite the local community and village committee to participate in selecting beneficiaries
- Announce the beneficiaries and post the list in a public place
- Announce the complaints and response mechanisms and forum for beneficiaries to raise complaints

During distribution

- If recruiting additional staff for distribution, advertise openly, e.g. in newspaper
- Form a distribution committee comprising the village committee, government official(s), and NGO staff
- Consider how distribution will include the most vulnerable, such as disabled people, elderly people, and other poor or marginalised groups
- Give the local authority and local community a date and location for distribution in advance where safety allows
- List items for distribution and their cost and display this list in advance in a public place
- In order to include people living a long way from the village or distribution point, consider giving them transport costs
- In order to include vulnerable people, such as pregnant women, for example, distribute to them first
- Ensure people know how to register complaints

During monitoring

- Invite the village committee to take part in the monitoring process
- Share findings with the village committee and community

From S. Phoeuk (2005) 'Practical Guidelines on Humanitarian Accountability', Oxfam GB Cambodia (internal, adapted).

<Components of Accountability>



TRANSPARENCY in mandate, objectives, beneficiary and entitlement criteria and implementation reporting

HAP Benchmark 2: The agency shall make the following information publicly available to intended beneficiaries, disaster-affected communities, agency staff and other specified groups: (a) organisational background; (b) humanitarian accountability framework; (c) humanitarian plan and financial summary; (d) progress reports; and (e) complaints handling procedures

Good Enough Guide Basic Element 1: Provide public information to beneficiaries and other stakeholders on their organisation, its plans, and relief assistance entitlements.



CONSULTATION with and PARTICIPATION of disaster survivors right from the beginning to gain their informed consent

HAP Benchmark Three: The agency shall enable beneficiaries and their representatives to participate in programme decisions and seek their informed consent

Good Enough Guide Basic Element 2: Conduct ongoing consultation with those assisted. This should occur as soon as possible at the beginning of a humanitarian relief operation, and continue regularly throughout it. 'Consultation' means exchange of information and views between the agency and the beneficiaries of its work. The exchange will be about:

- The needs and aspirations of beneficiaries
- The project plans of the agency
- The entitlement of beneficiaries
- Feedback and reactions from beneficiaries to the agency on its plans and expected results



FEEDBACK/complaints & redress-handling system

HAP Benchmark Five: The agency shall establish and implement complaints handling procedures that are effective, accessible and safe for intended beneficiaries, disaster affected communities, agency staff, humanitarian partners and other specified bodies.



Good Enough Guide Basic Element 3: Establish systematic feedback mechanisms that enable:

- Agencies to report to beneficiaries on project progress and evolution
- Beneficiaries to explain to agencies whether projects are meeting their needs
- Beneficiaries to explain to agencies the difference the project has made to their lives

COMPETENCE of staff

HAP Benchmark Four: The Agency shall determine the competencies, attitudes and development required for staff to implement its humanitarian quality management system.



LEARNING for continuous improvement

HAP Benchmark One: The agency shall establish a humanitarian quality management system.

HAP Benchmark Six: The agency shall establish a process of continual improvement for its humanitarian accountability framework and humanitarian quality management system.

Good Enough Guide Basic Element 4: Respond, adapt, and evolve in response to feedback received, and explain to all stakeholders the changes made and/or why change was not possible.

What the Listening Project has Learned

As the Listening Project (LP) wraps up its 13th Listening Exercise in Ecuador, we are looking back at the wealth of insights gathered in over 1,400 conversations with more than 3,200 people on how people in societies on the recipient end of international assistance view these efforts. We will produce a series of short Issue Papers in the coming months to explore in more depth key topics that have repeatedly come up, but here are a few insights that have captured our attention:

International assistance has become an “industry” more focused on delivering goods and services than on building relationships. People often characterize international assistance as “an industry” with multiple layers and actors, that is professionalized to meet certain delivery standards through often inflexible systems, programs and activities, and which reports against pre-determined indicators that often do not measure success in the ways they, as aid recipients, would. People tell us that they do not get to select the agencies that work in their communities, and that they often do not really know who these organizations are or what their agendas might be. They tell us that “how” agencies provide assistance, and the relationships they make in that process, is often more important to them than “what” agencies provide, even though these “tangible” outcomes are often what is reported on and evaluated.

This system limits opportunities and incentives for listening in open-ended ways. Since the aid system is designed to deliver goods and services efficiently, most agencies listen to people who are in (not outside of) the chain of delivery and they listen primarily for assessments of efficiency or effectiveness of their projects. While listening teams have heard lots of feedback on specific project details, such as “the wrong people got the aid,” “you have to know someone to get assistance,” “the seeds arrived too late to plant,” and so on, people everywhere consistently expressed concerns that seemed go deeper than programming flaws. They say that aid agencies should “invest the necessary time”, “go more slowly”, and “listen to people” in order to “learn about the real circumstances”, “get to know people”, and “show respect for people’s ideas and opinions.” It is clear that people care a great deal about the relationships they have with those who are trying to help them, and want to feel respected and listened to.

In many cases, the amount of aid and of money is not seen as the problem. Almost everywhere, people talk about the significant amounts of waste and mismanagement of resources in the aid system, for instance: “with all of the aid that has come into Kenya, it should be a heaven!” They suggest that agencies should combine resources to address deeper, systemic problems rather than use individual projects for piecemeal solutions. In several different places, people have described the “water bottle” effect of international assistance being passed from donors to international NGOs or contractors, to local NGOs or sub-contractors, to community-based organizations. As the last in line, the people in communities who are the intended beneficiaries get but a tiny sip.

Some even complained of the “excessive generosity” of agencies. Of much greater concern to people is how aid is given. Many resent “pre-packaged” programs that they see as signals of arrogance and disrespect, as if local people do not have the analytic ability to discuss and find solutions to the major issues affecting their lives. This has raised the question of whether the increased focus on “coherence” and “coordination,” which assumes that a shared overall strategy can bring desired results, is enough without the participation of local people. And is raising more resources the way to improve the effectiveness of international aid, when people seem to care more about how it is spent?

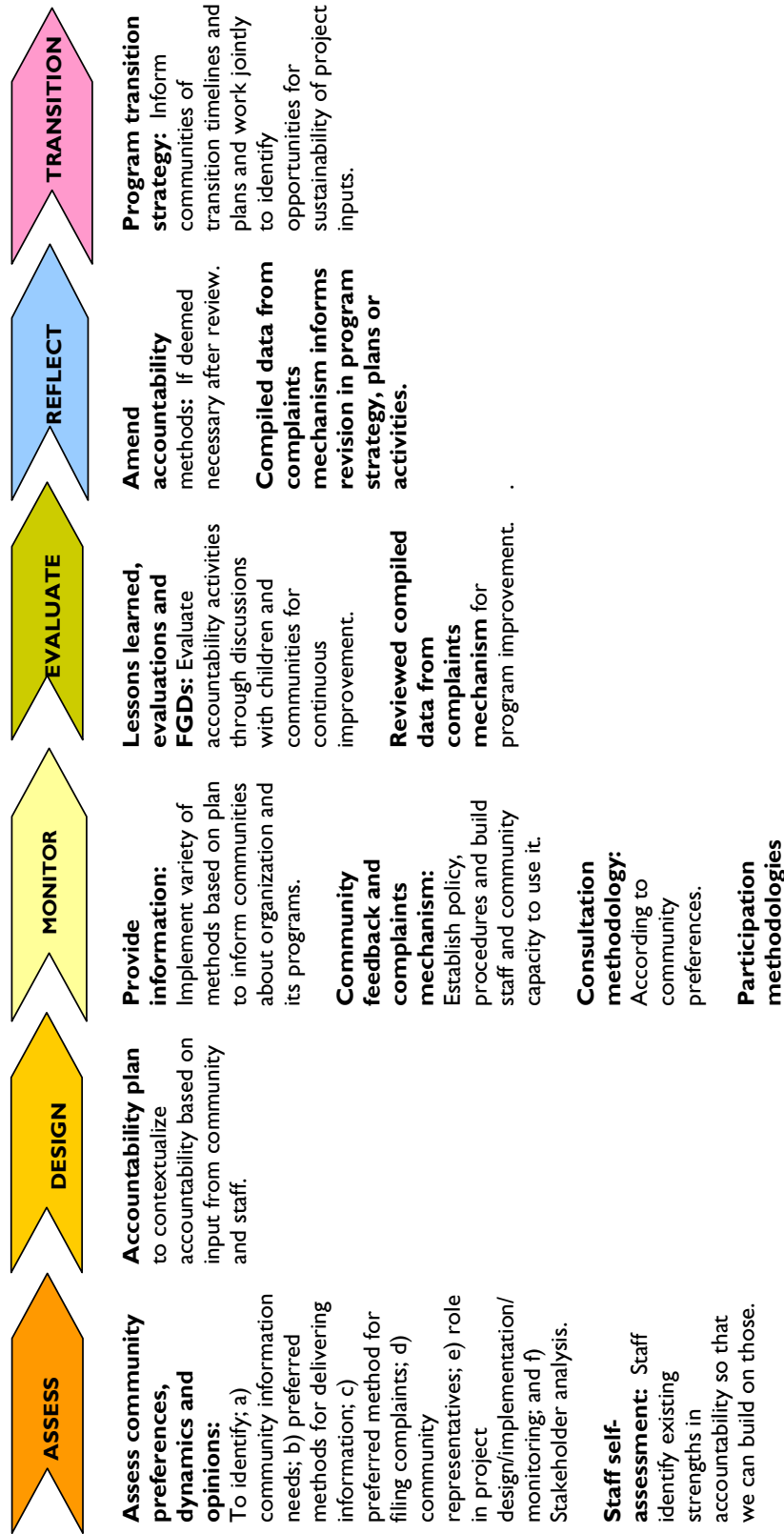
How Can You Be Accountable

Courtesy of HAP International

- Be a true representative of your agency: Understand what your agency believes in and strive to uphold these values and commitments.
- Set yourself a high standard of work: Use established guidelines, codes or principles to help guide your work. Inform people about those.
- Develop a culture of respect for individuals, their rights and their dignity: Ensure that you and all your colleagues are showing respect for each other and beneficiaries. Value the opinions of each other.
- Change the power balance: Recognize the huge imbalance of power and influence that exists between you and survivors. Try to change this through meaningful engagement with staff and beneficiaries.
- Be transparent about your progress: monitor your work and make sure it is still meeting the standards that you originally set out. Tell people the results, and change the plan and standards if necessary.
- Ensure that crisis-affected people can voice their opinions, and that you listen to and hear these, whether these are suggestions, requests or complaints. Your organisation is obliged to receive and respond to these.

Steps in Implementing Accountability

World Vision




公開シンポジウム「受益者の権利に配慮した援助活動のあり方」

<Alexandra Levaditis 氏(ワールド・ビジョン・インターナショナル)パワーポイント資料(原本)>

World Vision
HEA


Humanitarian Accountability Symposium 26 February 2010



World Vision
HEA

Why Accountability?

The Listening Project says...



...“how” agencies provide assistance, and the relationships they make in that process, is often more important...than “what” agencies provide, even though these “tangible” outcomes are often what is reported on and evaluated.

2

World Vision
HEA

Why Do We Need to Be Accountable?

Humanitarian organisations are unique in that consumers of their services have little or no influence upon their operations and; they rarely have means by which to appeal or complain.

Disaster survivors are rarely represented in:

- NGO governance arrangements
- Donor resource allocation procedures
- UN coordination mechanisms

3

World Vision
HEA

Don't We Already Do This?

Disaster Survivors are:

- Given no choice in who helps them
- Often treated as though they are all the same
- Subjected to “package” style relief interventions
- Not reported to by relief agencies

4

World Vision
HEA

Sphere Project Video

Guatemala case study

5

World Vision
HEA


What is Humanitarian Accountability?

Accountability emphasizes the “how”...

Accountability is the means by which power is used responsibly...Being accountable to beneficiaries requires that humanitarian agencies take account of beneficiaries' opinions, concerns, suggestions, and complaints.

Accountability is about the right to a say and the duty to respond

– HAP Standard



6

How Did it All Start?

In 1995, the Joint Evaluation of the International Response to the Genocide in Rwanda found:

- Need to improve accountability by monitoring performance of humanitarian action
- Need for sector-wide learning
- No standards in quality/ quantity of services
- Negligence by some agencies led to increase in suffering and death
- Agencies increasing but are unregulated
- Staff abuse of beneficiaries rights and dignity
- No regard given to local capacities, e.g. staff
- Lack of consideration for culture and context
- Low level of inter-agency coordination
- Protection, safety and security concerns

7

International Standards



8

How Do We Do It? World Vision HEA



TRANSPARENCY in mandate, objectives, beneficiary and entitlement criteria and implementation reporting



CONSULTATION with disaster survivors right from the beginning to gain their informed consent



FEEDBACK/complaints & redress-handling system



COMPETENCE of staff



LEARNING for continuous improvement

9

TRANSPARENCY in mandate, objectives, beneficiary and entitlement criteria and implementation reporting



HAP Benchmark 2: The agency shall make the following information publicly available to intended beneficiaries, disaster-affected communities, agency staff and other specified groups: (a) organisational background; (b) humanitarian accountability framework; (c) humanitarian plan and financial summary; (d) progress reports; and (e) complaints handling procedures

Good Enough Guide Basic Element 1: Provide public information to beneficiaries and other stakeholders on their organisation, its plans, and relief assistance entitlements.

10

CONSULTATION with and **PARTICIPATION** of disaster survivors right from the beginning to gain their informed consent

HAP Benchmark Three: The agency shall enable beneficiaries and their representatives to participate in programme decisions and seek their informed consent

Good Enough Guide Basic Element 2: Conduct ongoing consultation with those assisted. This should occur as soon as possible at the beginning of a humanitarian relief operation, and continue regularly throughout it. 'Consultation' means exchange of information and views between the agency and the beneficiaries of its work. The exchange will be about:

- The needs and aspirations of beneficiaries
- The project plans of the agency
- The entitlement of beneficiaries
- Feedback and reactions from beneficiaries to the agency on its plans and expected results

How do you want to be consulted?



12



FEEDBACK/complaints & redress-handling system

World Vision
HEA

HAP Benchmark Five: The agency shall establish and implement complaints handling procedures that are effective, accessible and safe for intended beneficiaries, disaster affected communities, agency staff, humanitarian partners and other specified bodies.

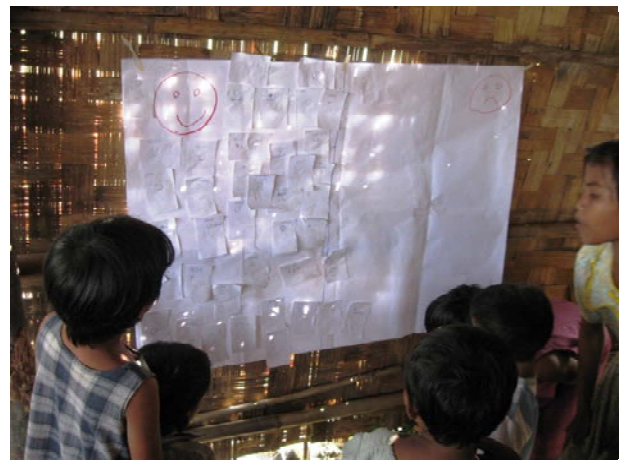
Good Enough Guide Basic Element 3: Establish systematic feedback mechanisms that enable:

- Agencies to report to beneficiaries on project progress and evolution
- Beneficiaries to explain to agencies whether projects are meeting their needs
- Beneficiaries to explain to agencies the difference the project has made to their lives

14

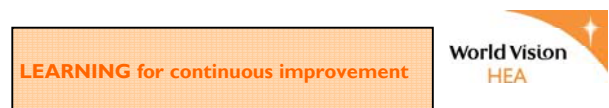
What kind of complaints mechanism do you prefer?





HAP Benchmark Four: The Agency shall determine the competencies, attitudes and development required for staff to implement its humanitarian quality management system.

21



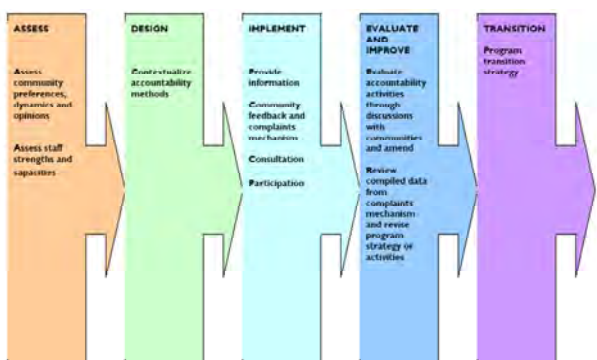
HAP Benchmark One: The agency shall establish a humanitarian quality management system.

HAP Benchmark Six: The agency shall establish a process of continual improvement for its humanitarian accountability framework and humanitarian quality management system.

Good Enough Guide Basic Element 4: Respond, adapt, and evolve in response to feedback received, and explain to all stakeholders the changes made and/or why change was not possible.

22

Implementing Accountability



Sri Lanka Tsunami Response Humanitarian Accountability Team (HAT)

WV response....

Accountability was integrated into program operations and decision-making, providing a vehicle to gather community perspectives and advocate for them internally.

WV methodology...

- A separate team created parallel to Operations and Programming to ensure neutrality and independence
- HAT staff presence in field, at national level and on Senior Management Team
- Served as a single umbrella for all community engagement, including consultations, social analysis, community action, community organization



"The lack of accountability to aid recipients is an acknowledged weakness of the international relief system. The recipients surveyed for the TEC studies reported that they were not adequately consulted...there were large information gaps between agencies and the communities they were serving"
- Tsunami Evaluation Coalition (TEC)

Main Components of HAT

World Vision
HEA



Community Engagement

Built capacity, methods and institutions to better ensure communities were active program participants.



Coordination and Advocacy

Community-based advocacy and national alliances helped ensure needs were met, including support to UN OCHA's information management unit.



Conflict Sensitivity and Peacebuilding

Conflict sensitivity enhanced peaceful relationships within and between newly resettled communities.

25

Impact on Communities

World Vision
HEA

- Newly-built community organizations established community management of WV-provided resources
- Community capacity to advocate for their own needs allowed greater control of their own recovery



- HAT complaints mechanisms allowed community opinions and complaints to be heard and result in change
- Vulnerabilities identified and addressed in program inputs
- Greater community cohesion

"There was no need to put complaints in the box because Viraj and Geethika were always here. Most of the time, there were here so we did not need to talk to anyone else." – Kalutara district

Benefits for World Vision

World Vision
HEA

- Saved WV over 5 million USD in unsuitable or duplicated construction (total budget 112 million USD)
- Caught problems early to reduce organizational risk – no legal cases despite having large programme
- Increased staff motivation and responsiveness to community needs
- Ensured projects were 'fit for purpose' in addition to meeting technical standards
- Improved program sustainability – greater likelihood projects would be maintained over the long-term
- Created a pool of internal staff advocates that saw the benefits of accountability in practice

"I would not want to manage another response of this size again without a HAT team. They really are essential to what we do." – Program Director, Sri Lanka Tsunami Response

Applying Learning Internally

World Vision
HEA

Tools

- **HAT Accountability Guide for Field Practitioners** is currently being modified for more global application and will include guidance and resources to implement accountability in the field.
- **Complaints Guide for Food Aid Programs** has just been completed to ensure all our food aid programs have strong complaints handling procedures in place by 2010

Knowledge

Accountability is not only taking root in emergency programming but will be piloted also in some of our development programs

Staff

An Accountability Community of Practice is being formed to serve as a knowledge sharing, capacity building and internal advocacy platform for accountability

28

Some Major Challenges

World Vision
HEA

- How to replicate HAT in contexts where funding and staff time is in short supply?
- Changing organizational culture and attitudes to prioritise community engagement, dialogue and feedback
- Better balancing demands on staff time and resources between beneficiary priorities with those of our organization, donors and peers in the sector (e.g. coordination through UN Clusters etc)
- Increasing 'sophistication' of NGO sector requires staff to continuously integrate new concepts

29

<Alexandra Levaditis 氏(ワールド・ビジョン・インターナショナル)パワーポイント資料(日本語訳)>

※これは英語版を翻訳した仮訳です。掲載されている内容は原文が優先しますので、日本語版は参考用としてご覧ください。

NGO研究会シンポジウム

World Vision
HEA

受益者の権利に配慮した援助活動のあり方

2010年2月26日

アレクサンドラ・M・レヴァディティス
ワールド・ビジョン・インターナショナル シンガポール事務所
「人道援助の説明責任プログラム」副代表



なぜ説明責任なのか？



「リスニング・プロジェクト」によると
...援助機関の「明確な」成果は頻
繁に報告され、それが評価される
こともあるが、むしろ、「どのように」
援助し、そのプロセスのなかで「ど
のように」受益者との関係を構築し
たかが、「何を」提供したかよりも
重要である。

1

World Vision
HEA

なぜ説明責任が必要なのか？

人道支援機関は、「独特」である。なぜなら、支援機
関が「サービス」を提供している「客」は、支援機関
の活動に対して影響力を持たないと同時に、その
機関に対してクレームを言う手段がないからである。

災害等の被災者は、多くの場合、以下のプロセス
に参加することができない:

- NGO による支援計画の管理と準備
- ドナーが提供する資金や資源の配分
- 国連の調整の仕組み

2

World Vision
HEA

私たちは既にこれらを行っているか？

被災者は:

- 支援者を選べない。
- 全員「同じ者」として扱われることが多い。
- 「パッケージ(一括)式」の援助の対象となっている。
- 援助機関によって報告されていない。

3

World Vision
HEA

「Sphere Project」ビデオ

グアテマラのケーススタディー

4

World Vision
HEA

人道的説明責任とは何か？

説明責任は、「どのように」を強調する...

説明責任とは、責任を持って権力が行使される手
段である。受益者に対して説明可能であるというこ
とは、人道支援団体が受益者の意見、悩み、提案、
不満を考慮することを必要とする。

すなわち、説明責任とは、意見を述べる権利と、そ
れに対応する義務のことである。

- 人道的説明責任の基準



5

どのようにこれら全てをスタートするのか？

1995年、『ルワンダのジェノサイドにおける国際社会の対応に関する合同調査報告』は以下を指摘した:

- 人道支援活動を監視することによって、説明責任を改善する必要性
- 広域分野の学習の必要性
- サービスの量と質の基準の欠如
- いくつかの援助機関の怠慢が引き起こした苦悩と死の増加
- 援助機関の数は増えたが、管理が行き届いていない機関があった
- 援助スタッフによる受益者の権利と尊厳の濫用
- 現地で活用できることの軽視(例: 現地スタッフ)
- 文化や背景の考慮の欠如
- 低レベルの援助機関の間の調整
- 保護、安全性、安全保障に関する懸念

6

国際的なスタンダード



7

どのように取り組むのか？



委任された権限(マンドート)、目的、受益者と権利の基準、実施報告における透明性



受益者の合意を得るため、支援活動開始直後から権利について受益者と協議する



受益者からの反響やクレームをもとに、事業を是正するための体制



スタッフの能力



継続的な向上のための学習

8

委任された権限(マンドート)、目的、受益者、資格基準そして実施報告における透明性



- 人道援助の説明責任(Humanitarian Accountability Project: HAP)の基準2: 援助機関は、支援を受ける受益者、被災した地域共同体、援助機関職員、特定のグループに対して、下記の情報を公開する: (a) 組織の背景、(b) 人道的説明責任の枠組み、(c) 人道的計画と財政の概要、(d) 進捗の報告、(e) クレーム受付の手続き
- 「十分の手引き(Good Enough Guide)」の基本的要素1: 受益者や他の関係者が所属する団体に対して、公共の情報、計画、支援活動における権利に関する情報を提供する。

9

支援内容や権利について、被災者が正しい情報を得た上で合意するための協議と参加

- 人道援助の説明責任(HAP)の基準3: 援助団体は、受益者や彼らの代表が支援プログラムの決定プロセスへの参加を促し、支援内容について正しい情報を得た上での合意(インフォームドコンセント)を得る。
- 「十分の手引き(Good Enough Guide)」の基本的要素2: 支援対象者との継続的「協議」を実施する。これは、人道援助活動が開始されてから出来る限り早く行い、その後も定期的に行う。「協議」とは、支援活動に関する援助団体と受益者の情報や見解を交換することである。意見交換の内容は以下の通り:
 - 受益者のニーズと要望
 - 支援団体の事業計画
 - 受益者の権利
 - 支援団体の支援計画やその結果に対する反応

10

どのようにあなたは相談されたいか？



11



受益者からの反響やクレームをもとに、事業を是正するための体制

World Vision
HEA

- 人道援助の説明責任の基準5: 支援団体は、苦情に対処するための手続きを定める。この対応は、受益者、被災した地域共同体、支援団体職員、他の人道援助団体と機関に対して、効果的かつ安全で、アクセスが可能でなければならない。
- 「十分の手引き(Good Enough Guide)」の基本的要素3: 計画的なクレーム対応の体制をつくり、以下を可能にする:
 - 支援者が、受益者に対して事業の進捗と展開を報告する
 - 受益者が、支援者に対して支援計画がニーズに合っているかどうか説明する
 - 受益者が、支援者に対して事業が彼らの生活をどの程度向上させたかを説明する

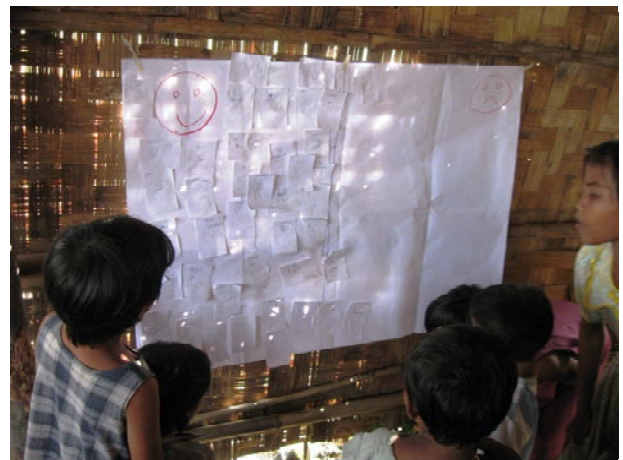
13

受益者はどのような苦情対応を求めるか？



14





援助スタッフの能力



人道援助の説明責任(HAP)の基準4:
支援団体は、質の高い人道支援の管理を行えるよう、
それに必要な、援助スタッフの適性や能力を評価する。

20

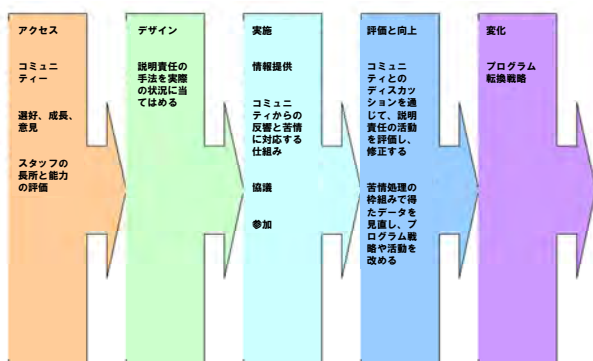
継続的向上のための学習



- 人道援助の説明責任(HAP)の基準1: 支援団体は、質の高い人道支援を管理するための体制を構築する。
- 人道援助の説明責任(HAP)の基準6: 支援団体は、人道的な説明責任の枠組みと質の高い人道支援を管理するため、継続的に向上する工程をつくる。
- 「十分の手引き(Good Enough Guide)」の基本的要素4: 受益者からのフィードバックに応え、それによってどのような変化を起こしたか又はなぜ変化を起こせなかったかについて、全ての関係者に対して説明する。

21

アカウンタビリティの実施



22

スリランカの津波被害への対応 「人道的説明責任チーム」 (Humanitarian Accountability Team: HAT)



ワールドビジョンの対応...

説明責任を支援活動と意思決定に組み込むことによって、コミュニティの様々な視点を収集し、彼らの主張を擁護した。

ワールドビジョンの方法論...

• 分かれたチームが、活動と計画を並行して行うことによって、中立性と独立性を確保する。

• 人道的説明責任チームの スタッフは、現場レベル、国内レベルでは、経営レベルに存在する。

• 全てのコミュニティへの対応するための一つの「傘」となり、意見交換、社会分析、コミュニティアクション、コミュニティの組織化に取り組んだ

23

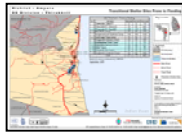
"The lack of accountability to aid recipients is an acknowledged weakness of the international relief system. The recipients surveyed for the TEC studies reported that they were not adequately consulted...there were large information gaps between agencies and the communities they were serving"
- Tsunami Evaluation Coalition (TEC)

「人道的説明責任チーム」の主な構成要素



コミュニティでの取り組み

コミュニティがより積極的に参加してもらうよう、能力を開発したり、方法論及び規則を策定した



調整とアドボカシー

コミュニティを基盤としたアドボカシーと国レベルの連携により、国連人道問題調整事務所（UNOCHA）の情報管理へのサポート等のニーズを満たすことができた。

紛争配慮と平和構築

紛争への配慮は、新たに定住したコミュニティ間の平和的な関係を強化した。



World Vision
HEA

24

ワールドビジョンへの利益

- 不安定又は重複した建築事業を見直すことにより、ワールドビジョンは500万米ドルを節約した（予算全体で1億1200万米ドル）
- 組織的リスク回避のため早期に問題を発見することができた。大規模な事業を抱えているにもかかわらず、法的な問題は発生しなかった。
- スタッフのモチベーションとコミュニティに対する責任感を高めることができた。
- 技術的な条件に合うことに加え、プロジェクトが本来の目的に合っていることを確保した。
- プログラムの持続性を向上させた。長期的にこのプロジェクトが維持できる可能性が高まった。
- HAPの考え方に賛同するスタッフのグループがつけられたことにより、現場における説明責任の重要性がスタッフ間で認識された。

26

"I would not want to manage another response of this size again without a HAT team. They really are essential to what we do." - Program Director, Sri Lanka Tsunami Response

World Vision
HEA

コミュニティへの影響

- 新たにつくられたコミュニティ組織は、コミュニティ自身が支援物資を管理する体制をつくった。
- コミュニティのニーズを主張する能力は、彼ら自身が復興活動を管理する体制をつくった。



- クレーム対応体制は、支援者がコミュニティの意見や苦情を聞くことにつながり、その結果、変化がもたらされた。
- プログラムへの情報提供により、脆弱性が見つかり、そのための対策が図られた。
- 更なるコミュニティの団結が実現した。

25

"There was no need to put complaints in the box because Viraj and Geethika were always here. Most of the time, there were here so we did not need to talk to anyone else." - Kalutara district

World Vision
HEA

内部での学習

ガイドブック

- 『HAT 実務者のための責任説明の手引き』は現在、更に世界的に適用できるものにするため再編集しており、現場で説明責任を確保するためのガイドラインや情報が追加される。
- 『食糧援助における苦情対処の手引き』が完成。この手引きは、我々の食料援助プログラムが、効果的な苦情対処法を確保することを目的としている。

知識

説明責任は、緊急援助事業にのみ定着するのではなく、いくつかの開発支援事業においても試されている。

スタッフ

説明責任を担うスタッフによるコミュニティがつけられ、情報共有、能力開発、アドボカシーを行うプラットフォームを提供している。

27

World Vision
HEA

主な課題

- 資金とスタッフの時間が足りない時にどのように「人道的説明責任チーム」を編成すればよいのか？
- コミュニティエンゲージメント、対話、フィードバックを優先順位付けする際の、組織文化と姿勢の変化
- スタッフの時間のバランスを取るべきというニーズがある。また、受益者のリソース、ワールドビジョンのリソース、ドナーのリソースの優先順位を決める際、もっとバランスを取るべきというニーズがある。（例：国連機関を通じた調整など）
- 増大する「洗練」は、NGOスタッフが継続的に新しい概念を取り入れることを必要とする。

28

World Vision
HEA

子どもの声を聞く

セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
定松 栄一

なぜ子どもの声を聞くのか

1. それが子どもの権利だから

- 子どもの権利条約12条「意見表明権 (Rights to be heard)」
- 子どもを権利主体としてみる子どもの権利条約全体で最も重要な条項

2. 子どもが何を必要としているかは、子どもが最も良く知っており、子どもの見解はしばしば大人の見解とは異なるから

ネパールの教育事業から
学校に何が必要か

- おとなは「フェンス」
 - 子どもは「遊具」
- 「質の高い教育」
- 先生は「教材」や「教員研修」
 - 生徒は「体罰禁止」
 - 「生徒・先生・親がそれぞれの役割を果たすこと」
(子ども会リーダーの言葉)

3. 子どもは大人以上に強力な社会 変革の担い手となり得るから

- 子どもは問題の本質を鋭く指摘する
- 子どもに指摘されることはおとなにとって面目を失う
- 「子どもたちがここまでやるからにはよほどのことに違いない」
- 子どもたちのアイデアはしばしばおとなよりも創意に満ちている

子どもたちが起こした行動の例

- デモ行進をして親に教室の修理をさせた
- 役場の前で座り込みをして教員の給与支払いや遊具の提供をさせた
- 政治家に子どもの権利を憲法に含めるよう訴えた
- 災害の被災者を救うために街頭募金をした。
- 自分たちでお金を集めて貧しい家の子どもの学費を都合した

子どもの声を聞く方法

- 子どもがお互いに自由に意見を言える環境を作る(例:子ども会、識字教室)
 - 子どもたちとの信頼関係をつくる(「この人なら自分たちの意見をちゃんと聞いてくれる」)
 - 子どもたち自身で考えるよう励ます
 - 子どもたちのアイデアを活かすようおとなに働きかける
-

<織田靖子(国際協力機構)パワーポイント資料>

紛争影響地域での受益者の声を聴く

ポイント

「受益者の権利に配慮した援助活動のあり方」

— 紛争影響地域における受益者の声を聴く —

- 国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) と国際協力機構 (JICA) の経験から -

織田 靖子
国際協力機構 援助協調シニア・アドバイザー (UNHCRより出向)
2010年2月26日

1. 言葉の定義(議論のための)?

2. 今、昔 : 何かが変わったのか?

3. 関連議論 : Humanitarian Space ?

4. 所感 :

なぜ変わったのか? 転換期?

援助のあり方について過去から学ぶことはあるか?

今後の日本の援助?

1. 言葉の定義(議論のため)?

- 「紛争影響地」とは?
紛争中、紛争直後、紛争周辺地域
- 「受益者」とは?
紛争直接責任者以外すべての人々を想定
- 「声を聴く」とは?
直接、間接、Observation (実際に見る事)

2. 今、昔: 何かが変わったのか?

例:

1991年 イラク(北部)

1993/4年 モザンビーク

1999年 コソボ状況

2001年 マケドニア 等

例:

2001/2年以降のアフガニスタン

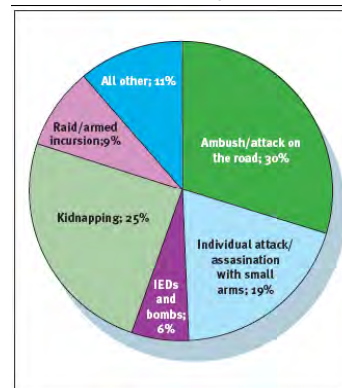
2003/4年以降のイラク

ソマリア



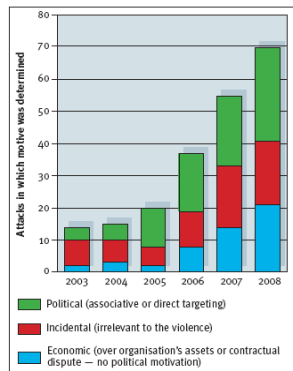
Source: UNHCR eCentre and JICA Security Risk Management Workshop Guide, November 2009 p.11

Methods and tactics of violence against aid workers, 2006-2008



Source: UNHCR eCentre and JICA Security Risk Management Workshop Guide, November 2009 p.13

Motives behind attacks, 1997-2008



Source: UNHCR eCentre and JICA Security Risk Management Workshop Guide, November 2009 p.13

3. 関連議論

- Humanitarian Space ?

最近の参考文献:

Safeguarding humanitarian space: a review of key challenges for UNHCR, PDES/2010/01, February 2010

Professional standards for protection work, ICRC, October 2009

4. 所感:

- なぜ変わったのか? 転換期?
- 援助のあり方について過去から学ぶことはあるか?
- 今後の日本の援助?

国際法の枠組み

考え方の基礎

- 「国家」間の関係 (Relationship among "States")
- 国家主権と全ての国家は平等であるという原則

手段

- 条約、議定書等 Treaty (Convention, Covenant etc.) e.g. 1951 Refugee Convention
- 慣習法 Custom(ary law) (incl unwritten, practices, beliefs) e.g. non-refoulement

難民・避難民の権利に関する条項を含む国際法

- 国際難民法 (International refugee law) — 難民の定義など
- 国際人権法 (International human rights law) — 基本的人権、差別撤廃、など
- 国際人道法 (International humanitarian law) — 戦争・紛争時のルール
- 国際犯罪法 (International criminal law) — 人身売買など

関連議論

- 国家主権 vs 個人の権利の保護。国家が国内紛争の当事者である場合、国際社会にその国の内部問題に介入する責任はあるか?
- 人間の安全保障?
- Humanitarian Space?
- 紛争の質の変化とnon-state actorsの関与? 等

援助のあり方について過去から学ぶことはあるか?

モザンビーク社会調査の例



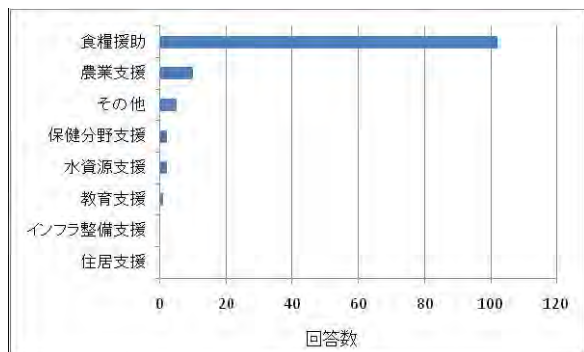


世帯調査:2州全140世帯にて実施

- テテ州:118世帯(84%)
- ニアサ州:22世帯(16%)

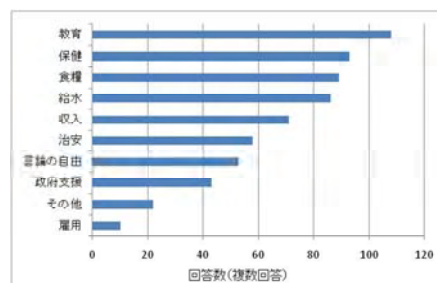


復興初期の支援のうち最も役立った支援内容



出典:効果的な紛争後復興支援のあり方に関する基礎的研究〜モザンビークを事例に〜JICA、2009年8月、p.38

図 4.4.7 生活が改善したと考える主な理由・要因



出典:効果的な紛争後復興支援のあり方に関する基礎的研究(事例分析)
〜モザンビークを事例に〜 p.37

証言の例

Q: 紛争終結直後、国連や国際援助団体がいなかったらどうなっていたと思うか？

A: あの時は必要だった。(お金や物資だけでなく)国連や国際援助団体は(政府と反政府)両方の地域に入ることができたから。

Q: 平和達成の最も重要なカギは？

A: われわれ自身が(紛争相手と)Dialogue(対話)をした事.

「効果的な紛争後復興支援のあり方に関する基礎的研究～モザンビークを事例に～」社会調査および有識者インタビューより

プロテクションを中心とした事業の実践 ～難民支援協会の活動を通じて～

2010年2月26日

特定非営利活動法人 難民支援協会
事務局長 石川 えり



プレゼンテーションの目的

- 日本国内外(パキスタン06年、スワジランド08年、日本)でのプロテクションを中心とした事業の概要を紹介し、受益者の声を聴き、彼(女)らの権利を中心とした事業実施のあり方を考える。

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

2

パキスタンでの取り組み

■ パキスタン地震の概要

- 2005年10月8日発生
- マグニチュード M7.6
- 死者7万5千人以上、負傷者10万人以上、およそ350万人が家を失った(報道等より)



がれきになったビル(パキスタン・イスラマバード)
【写真提供: AFP=時事】
ピースウィンズ・ジャパンとの協力により実施

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

3

ムザファラバードにおける被害

- 死者約6万人、全半壊を合わせると14万件に近い家屋が損傷
- 住民40万人中、およそ30万人が避難を余儀なくされた(IOMより)



Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

4

ムザファラバードの特徴

- インドと土地の帰属をめぐって争っているカシミール領域内にある。
 - 地震以前は外国人の立ち入り禁止
 - 軍事基地が点在
- 山間部にある
 - 土地の確保が困難
 - 帰還が困難



Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

5

特別な保護を要した人々とその特徴

- 子ども
 - 両親を亡くした子ども／保護者に同伴されていない子ども
 - 障害者の子ども
- 女性
 - 配偶者を亡くした女性
 - 妊婦
 - DV
- 高齢者
- 障がい者
- 病人
- 低カースト者
- 住む土地を無くした人(地滑り等)
- (インド支配側カシミールから逃れていた)難民

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

6

プロテクションに関して挙げられていた課題

- 全体
 - キャンプ閉鎖の時期と自主的な帰還の確保
- 特定の集団
 - 学校へ行かない／行かれない子ども(特に女の子)
 - ドメスティック・バイオレンス
 - 配給に来られない女性
 - インド側からのカシミール難民の非送還＋住居の補償
 - 土地を失った人々への補償

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

7

実施した事業内容-1

- 被災住民(女性)へのエンパワメント
 - 「世界女性の日」を祝う中でのメッセージの発信
 - 参加女性からのメッセージ→ボードに貼り出す
 - (帰還後も) 医者がほしい
 - 教育が受けたい
 - 主催者からのメッセージ
 - (女子への) 教育の重要性

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

8

実施した事業内容-2

- 支援関係者へのワークショップ
 - ✓ キャンプ内、帰還におけるプロテクション → 支援から周辺化される人の認識共有
 - ✓ ジェンダーに基づく暴力への対応 → キャンプ内でのReporting Lineの確認



Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

9

実施した事業内容-1

- 被災住民(女性)へのエンパワメント
 - 「世界女性の日」を祝う中でのメッセージの発信
 - 参加女性からのメッセージ→ボードに貼り出す
 - (帰還後も) 医者がほしい
 - 教育が受けたい
 - 主催者からのメッセージ
 - (女子への) 教育の重要性

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

8

実施した事業内容-2

- 支援関係者へのワークショップ
 - ✓ キャンプ内、帰還におけるプロテクション → 支援から周辺化される人の認識共有
 - ✓ ジェンダーに基づく暴力への対応 → キャンプ内でのReporting Lineの確認



Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

1

スワジランドでの取り組み



ワールドビジョン・ジャパンとの協力により実施

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

10

スワジランド(南部アフリカ広域)地図



Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

11

はじめに①

2006～07年にかけて南部アフリカ
広域を干ばつが襲う
→ジンバブエ、レト、スワジランドで
合計約500万人

国際社会の対応:
※ジンバブエ
(UN Consolidated Appeal-46.6%)
※レト(UN Flash Appeal-48.5%)
※スワジランド
(UN Flash Appeal-26.6%)



Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

12

はじめに②

大規模干ばつによる被害:スワジランド
→不十分な降雨(特に農耕期)
→メイズ生産:前年比マイナス60%
→被災者数: 407,000人(人口の約40%)

全国にわたる被害(通常の干ばつでは
被災しない地域を含む)
※一日1ドル以下で生活する人口:国
民の69%
※HIV/AIDS罹患者の割合:33.4%
(平均余命約34歳)



Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

13

支援全体の概要

- ①: **水・衛生**
→新規井戸設置、井戸修復、保
健衛生トレーニング実施
- ②: **フード・セキュリティ**
→種子・農具および点滴灌水
キットの配布、農業トレーニング
実施
- ③: **脆弱者**
→脆弱者プロファイリング、
Neighboring Care Point建設、
管理運営者トレーニング実施



Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

14

アセスメントの実施

- 受益者の参加を得たFGD(Focus Group Discussion)の実施。
- 受益者を男性、女性、弱者に分け、コミュニ
ティにおけるプロテクション上の課題及び弱
者の課題を共に考える。

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

15

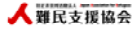
アセスメントでの発見ー1

1. 前向きな点
 - ・男女の平等な参加
 - ・虐待が犯罪であるという意識があること
 - ・コミュニティ内における課題に対する対処法
を理解していること
 - ・コミュニティ内の弱者について理解し、また
解決のために働いていく意志を持っているこ
と。

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

16

アセスメントでの発見ー2



2. コミュニティ全体におけるリスク

- ・水へのアクセスがないこと
- ・家畜の盗難

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

17

アセスメントでの発見ー3



3. コミュニティにおける弱者

- ・孤児
- ・両親に捨てられた子ども
- ・子どもが家長の家庭
- ・祖父母に育てられている子ども／孤児
- ・病気の養父母に育てられている子ども／孤児
- ・障害を持つ子ども
- ・家族／養父母等により性的に搾取されている子ども
- ・家族に支援されていない高齢者（とりわけ女性）
- ・障害者
- ・HIV/AIDSを含む病気を持つ人

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

18

アセスメントでの発見ー4



4. とりわけ弱者の人が抱えるリスク

- ・性的搾取
- ・搾取
- ・飢餓を含む不十分な生活水準
- ・強盗
- ・土地を相続する権利の否定（とりわけ子ども・女性）
- ・アクセスへの制限（登録、教育）
- ・物理的なアクセスへの制限（水、食糧、ヘルスサービス）

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

19

アセスメントでの発見ー5



5. その他、コミュニティで指摘された課題

- ・アルコール

6. その他、指摘されなかった課題

- ・Female Genital Mutilation

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

20

日本での取り組み



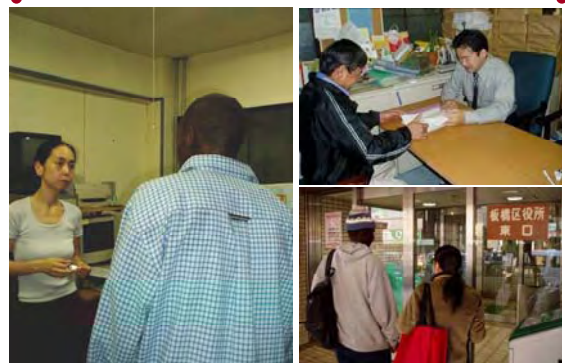
■ 日本と難民

- 1979年 閣議決定によりインドシナ難民の受入開始
- 1981年難民条約加入、1982年より難民審査制度開始
- 2009年までに508人が認定、882人が準認定（人道配慮による在留許可）

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

21

1. 日本にやってきた難民一人ひとりへの支援



Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

22

2. よりよい難民保護制度をつくるための調査、情報収集および政策の提言

難民支援協会



3. 難民についての広報および情報の発信

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

23

難民の声を聴く中での支援の拡充

難民支援協会

- 難民としての認定を受けるまでのサポート中心
- セーフティネットの確保

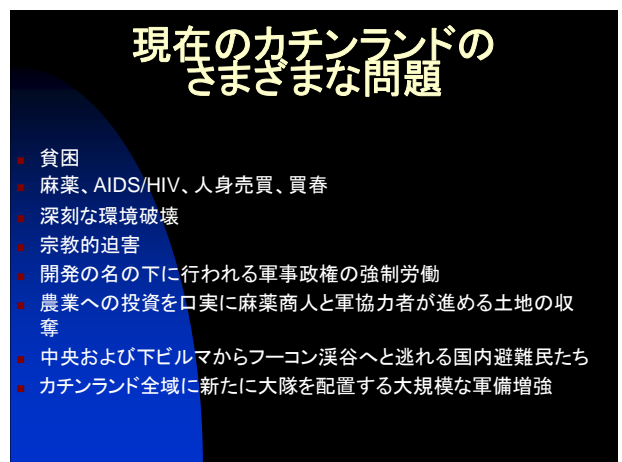
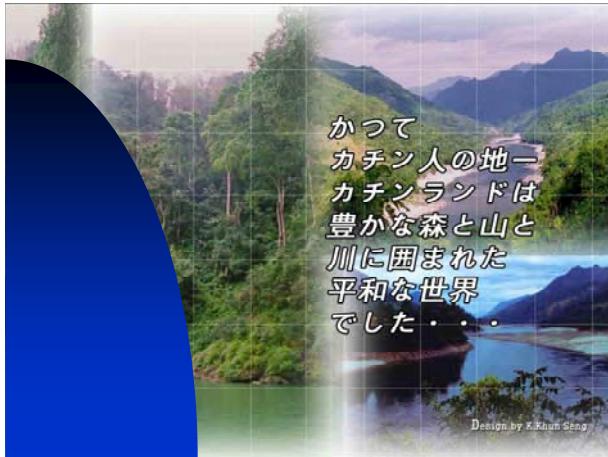


- 難民認定を受けた後の定住支援（高度な日本語教育、高等教育、スキルアップ、妊娠・出産、健康維持ワークショップ等ライフステージにあわせたニーズへの対応）
- コミュニティの支え合いを支援

Copyright © 2010 Japan Association for Refugees All Rights Reserved.

24

<女性難民パワーポイント資料>



ひすいの乱掘



強制労働をさせられていた時の様子。

麻薬商人と軍部協力者によって 進められる土地の収奪

- リド、フーコン溪谷諸地域などカチンランドのあらゆる場所で行われる土地の収奪。
- 大規模農地開発と建設にまつわる非合法的な土地収奪（ユザナとトゥーの2つの商社はフーコン溪谷周辺に数千エーカーの土地を入手）。
- タイザのトゥー商社はパーカンのひすい鉱山地域を占拠。
- 村に住む人々は軍事政権により土地を手放さざるをえない事態に。

一人でも多くの日本のみなさんが
わたしたちすべての暮らす
アジアの平和のために
一緒に立ち上がってくださるよう心か
ら願っています。

2009 年度外務省 NGO 研究会 報告書
「受益者の権利に配慮した援助活動のあり方」
2010 年 3 月発行

発行 外務省国際協力局民間援助連携室

編集・事務局 特定非営利活動法人 難民支援協会
〒160-0004
東京都新宿区四谷 1-7-10 第三鹿倉ビル 6 階
TEL:03-5379-6001 FAX:03-5379-6002
URL: <http://www.refugee.or.jp/> E-mail: info@refugee.or.jp

印刷・製本 アンリツ興産株式会社

©2010Japan Association for Refugees Printed in Japan

